

概要版

# 生成AIと日本 2026

2026年4月

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター

報告書URL：<https://www.glocom.ac.jp/activities/project/11634>



INNOVATION  
NIPPON

## 目次

1. 全体の総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p005
2. 生成AIの利用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p009
3. 生成AIリテラシー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p025
4. 生成AIへの評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p034
5. 政府・企業への要望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p044
6. 企業での生成AI活用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p053
7. 生成AIの受容決定要因・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p060
8. 生成AI利用と幸福感の関係性・・・・・・・・・・・・・・・・ p064
9. 生成AIに対するタスク委任度と信頼性の関係・・・・・・・・ p069
10. 生成AIの擬人化的認知と探索的利用意図・・・・・・・・ p074
11. 生成AIの導入と定着に関するインタビュー調査・・・・・・・・ p077
12. 生成AIに関する文献調査・・・・・・・・・・・・・・・・ p082
13. 提言：生成AI時代における社会実装の方向性・・・・・・・・ p086

# 1. 調査概要

## 背景・目的

近年、生成AI（大規模言語モデルや画像生成AIなど）は、急速に社会へ浸透している。個人による情報収集や文章・画像の作成にとどまらず、企業における業務支援や試作開発、教育・行政分野での試行的な活用など、その利用範囲は着実に広がっている。一方で、生成AIは利便性の高い技術であるがゆえに、その影響は個人の利用行動にとどまらず、組織や制度、社会的信頼のあり方にも及んでいる。

このような状況で、わが国における生成AIの社会実装が進む中で生じている変化と課題について検討するには、実証研究を実施し、エビデンスベースで進めることが肝要である。そこで本研究では、全国規模のアンケート調査およびインタビュー調査を軸に、生成AIの利用実態や意識、社会的影響に関する幅広い研究を行い、わが国がとるべき施策について検討する。

## 調査事項

1. 生成AIの利用率、利用場面、利用方法、非利用理由（時系列比較を含む／無意識利用も可能な限り拾う）
2. 年齢・所得・職業・地域・教育・企業規模等による活用及び効果の格差の実態と構造
3. 生成AIに対する信頼性評価とリスク認知（偽情報・著作権・プライバシー等）
4. 活用がもたらす主観的な効率化・創造性向上・心理的負担等の変化
5. 制度的整備に対する期待と規範意識、政府・企業に求められる役割
6. 教育・公共サービスにおける生成AI導入への賛否と条件
7. 生成AIに関するリテラシーの水準と啓発授受経験・ニーズ（知識、判断力、利用姿勢）

# 1. 調査概要

## 調査内容

### 1. 文献調査

国内外の報告書、学術論文、統計データを調査し、生成AIの活用事例や関連する知見を整理。結果は報告書にまとめ、アンケート調査票にも反映。

### 2. アンケート調査分析

調査は予備調査と本調査の二段階で実施し、日本全国に居住する者を母集団として、性別・年代別の人口構成に基づいた割付を行った。予備調査では、生成AIを利用したことのある人の割合を把握することを主な目的とし、全国の20歳から69歳までの生活者を対象に実施。20,000件の有効回答を回収した。その後、本調査を実施し、5,000件以上の有効回答を回収。2024年に実施した調査と同一の設問を一部含めることで、利用率、利用目的、リテラシー、リスク認知等について時系列での変化を定量的に把握できるようにした。

### 3. インタビュー調査

調査対象は、生成AIを積極的に活用している生活者、企業関係者、教育関係者、自治体担当者等の中から、活用目的や活用領域が異なる者を中心とした10名を対象に、半構造化インタビューを実施。生成AIの活用動機や期待、不安、導入時に直面した障壁、制度・倫理面に関する懸念のほか、実際の試行錯誤や失敗経験、利用が定着するまでの過程などを調査。オンライン形式で実施した。

# 1

## 全体の総括

# 1. 全体の総括①

## 生成AIの普及率と格差

- 生成AIの普及は進んでいる一方で、年齢、学歴、居住地域、企業規模などによる差が確認された（図表1.1）。
- 特に業務利用については、大卒以上の層や大都市圏の居住者、大企業の従業員で利用率が高い傾向が見られた（図表1.1）。

## 生成AIの安全な利用におけるリテラシー面の課題

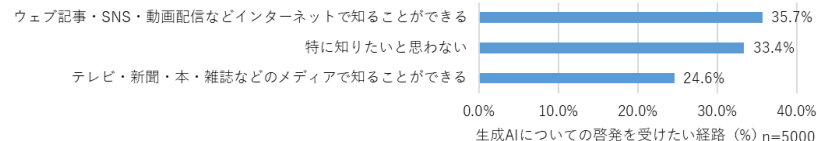
- 生成AIに関する基本的な知識の理解度は、利用者においても高くないことが確認された（図表1.2）。
- 特に、画像生成AIを利用した際のバイアスや著作権に対する知識の低さが浮き彫りとなっているほか、生成AIというシステムや使われている技術に対する理解度の低さも見えた（図表1.2）。
- 若年層は生成AIの利用率が高い一方で、必ずしもAIに関する知識が十分とは言えない可能性も示唆された（図表1.2）
- 知識を身に着ける手段としては、ウェブ記事・SNS・動画配信などのインターネットやアプリ、テレビ・新聞などのメディアなどが期待されているが、生成AIについて特に学びたいと考えていない人も3人に1人程度存在していることが明らかになった（図表1.3）。

	個人の生成AI利用率			企業の生成AI利用率
	仕事	プライベート		
全体	24.2%	43.6%	全体	28.6%
年代			従業員数	
20代	30.3%	57.6%	30人未満	17.4%
30代	25.5%	48.1%	500人未満	26.0%
40代	25.2%	45.6%	500人以上	41.7%
50代	23.4%	38.6%	売上規模	
60代	16.2%	31.7%	1億円未満	18.9%
			100億円未満	27.6%
			100億円以上	49.1%
学歴			事業年数	
大卒未満	14.0%	37.1%	5年未満	28.5%
大卒以上	32.6%	50.0%	30年未満	25.6%
居住地			30年以上	30.9%
非大都市圏	20.9%	42.1%		
大都市圏	28.1%	45.6%		

図表1.1 個人と企業の生成AI利用率

属性	リテラシースコア		問題別正答率	
	スコア	問題のテーマ	正答率	
全体	3.73	生成AIの基本的な機能	14.0%	
年代				
20代	3.27	生成された誤情報に騙されないための行動	27.7%	
30代	4.17	生成AIに入力すべきでない情報	47.2%	
40代	3.98	ビジネスメールを作成時の注意点	50.4%	
50代	3.68	生成した画像の著作権やパブリシティ権への考え方	24.5%	
60代	3.54	著作権やパブリシティ権の侵害を予防するための指示	45.1%	
仕事利用				
無し	3.43	生成AIを活用する時の倫理	44.6%	
有り	4.29	出力内容の偏見を軽減するための指示の工夫	13.3%	
プライベート				
無し	3.19	生成AIの一般的な特性	52.5%	
有り	4.41	旅行計画の出力に対する適切な検証行動	53.9%	

図表1.2 リテラシースコアと問題別正答率



図表1.3 生成AIについての啓発を受けたい経路

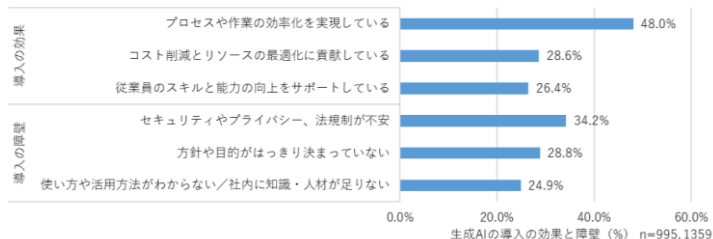
# 1. 全体の総括①

## 更なる普及に向けた課題、政府や企業に求められている内容

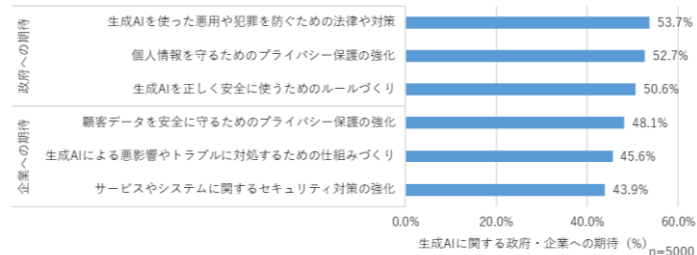
- 生成AIを導入している企業の多くは業務効率化などの効果を実感していると回答している（図表1.4）。
- 一方で、企業が生成AIを導入していない理由としては、セキュリティやプライバシー、法的リスクへの懸念が多く挙げられた（図表1.4）
- 回答者全体においても、政府に対しては安全な利用環境の整備や適切なルールづくりが求められており、企業における導入障壁と整合的である（図表1.5）
- また、生成AIの関連企業に対してもAIの適切な利用ルールの整備や責任ある運用が求められている（図表1.5）。

## 生成AIの利用と幸福感との関連

- 生成AIの利用は仕事・プライベートを問わず、複数の因子から主観的幸福度の高さに関連しており、仕事での利用は自己実現や楽観、独立という観点、プライベートでの利用はつながりと感謝という観点での幸福度が高い傾向にある（図表1.6）。



図表1.4 企業への生成AIの導入による効果と導入の障壁（各上位3項目）



図表1.5 政府や企業に求められている内容（各上位3項目）

	仕事での利用	標準化係数	プライベートでの利用
PANAS	ポジティブ	利用していると高い傾向 <	利用していると高い傾向
	ネガティブ	利用していると高い傾向	利用していると高い傾向 >
生活満足度 (LS)	-	-	-
人生満足度 (SWLS)	利用していると高い傾向	>	-
幸福の四因子	自己実現と成長	利用していると高い傾向 >	利用していると高い傾向
	つながりと感謝	利用していると高い傾向	利用していると高い傾向 <
	前向きと楽観	利用していると高い傾向 >	利用していると高い傾向
	独立とマイペース	利用していると高い傾向 >	利用していると高い傾向

注：赤色は望ましい傾向、青色は望ましくない傾向を示す

図表1.6 生成AIの利用と幸福度の傾向

# 1. 全体の総括①

## 生成AI時代における社会実装の方向性についての提言

本調査研究では、以下の9個の提言を導出した。詳しい内容は第13章を参照。

### 第一の方向性：生成AIの利用機会を社会全体に広げる

1. 生成AI政策の重点を「普及率中心」から「利用機会の格差是正」へ広げる
2. 社会全体に向けた基礎的AIリテラシー教育を強化する
3. AIリテラシー教育を講座中心から日常利用の中で学べる仕組みへ転換する

### 第二の方向性：安全で信頼できるAI利用環境を整備する

4. AIの利用領域と人間の判断の役割を整理する
5. 企業のAI導入支援を操作教育から運用ガバナンス整備へ重点転換する
6. AI利用において検証と批判的思考を重視する教育を推進する

### 第三の方向性：AI活用による社会的価値の拡張

7. 企業はAI導入の効果を測定する仕組みを整備する
8. 行政AIは人の代替ではなく行政サービスへのアクセス改善に活用する
9. 生成AI社会の目標を効率化ではなく人間の活動の高度化に置く

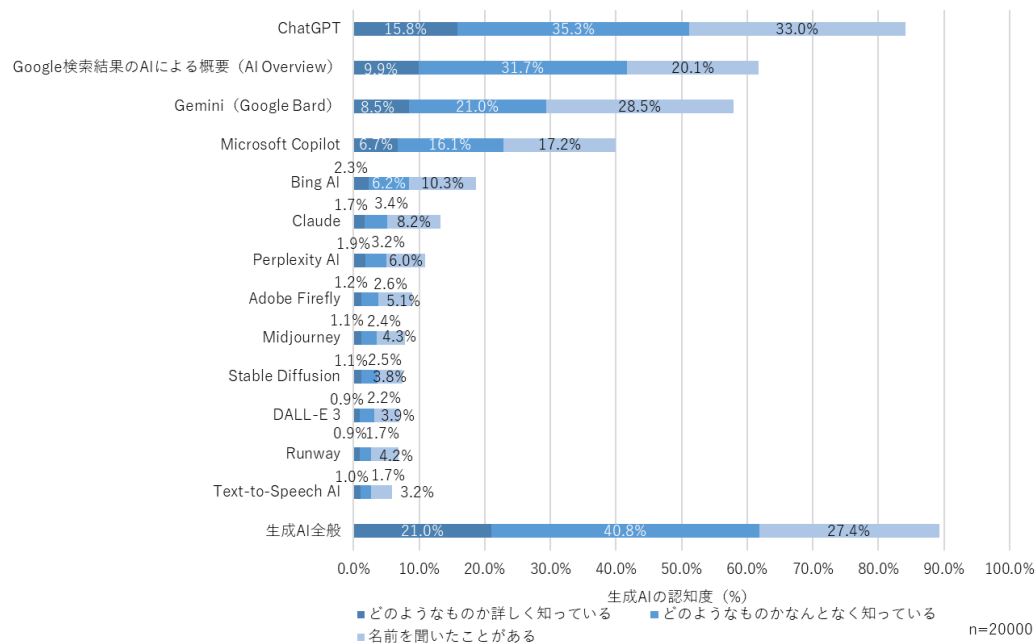
# 2

## 生成AIの利用状況

## 2. 生成AIの利用状況

### 生成AIサービス全般の認知度は約9割

- 生成AI全般について「全く知らない」と回答した人は10%強であり、名前の認知度はほぼ9割に達している（図表2.1）。
- Innovation Nippon 2024（IN2024）の結果と比較すると、各サービス認知度と利用率が全体的に向上。
- その他のサービスについては「全く知らない」と回答した人が圧倒的に多い。ほとんどのサービス、特にテキスト生成AI以外では9割以上の人がかく知らないと答えており、ChatGPTやGoogle、Microsoftといった身近なメガテック以外の生成AIサービスは認知度が低い。

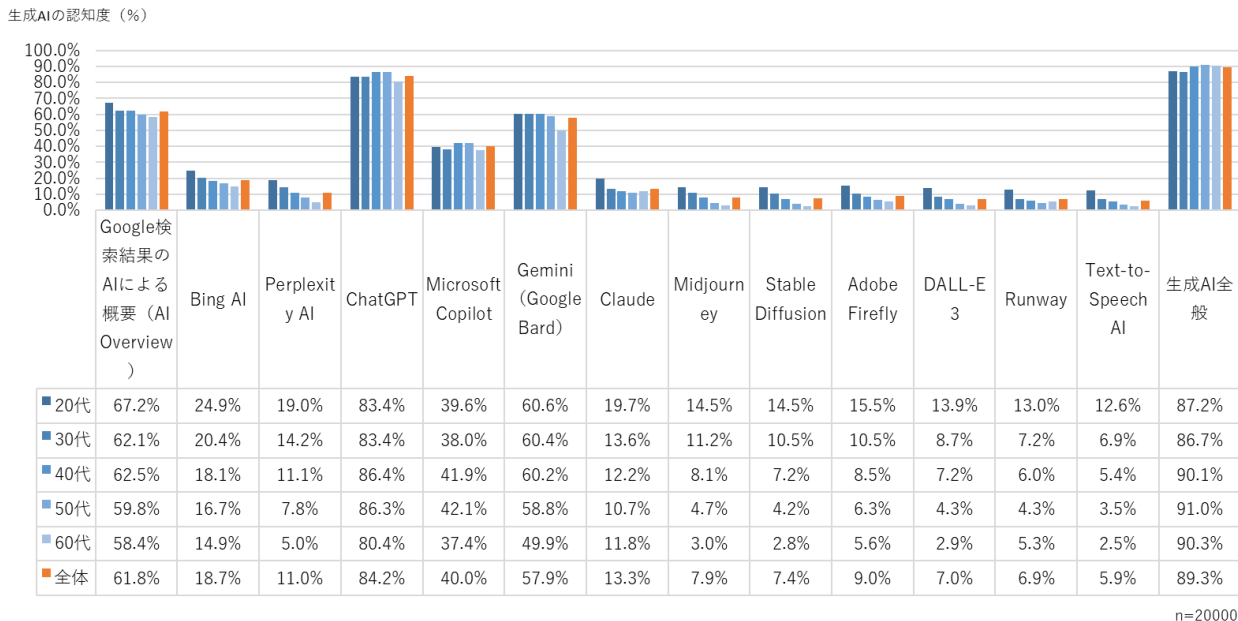


図表2.1 生成AIのサービス別認知度に関する各選択肢の割合

## 2. 生成AIの利用状況

### 生成AIサービスの認知度、若い世代ほど多様化

- 年齢が低い人ほど多様な生成AIサービスを認知している傾向がある（図表2.2）。
- 一方、生成AI全般の認知度は寧ろ40代以上の方が高い。

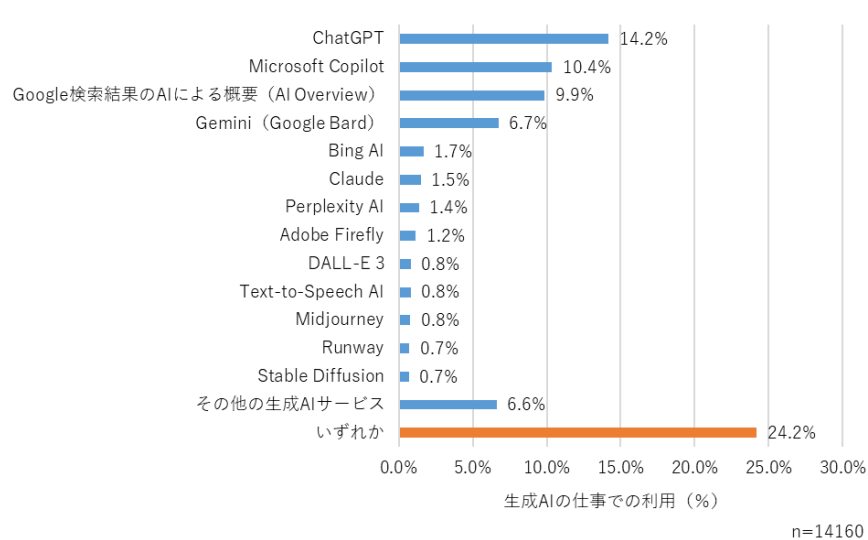


図表2.2 生成AIのサービス別認知度（年代別＋全体）

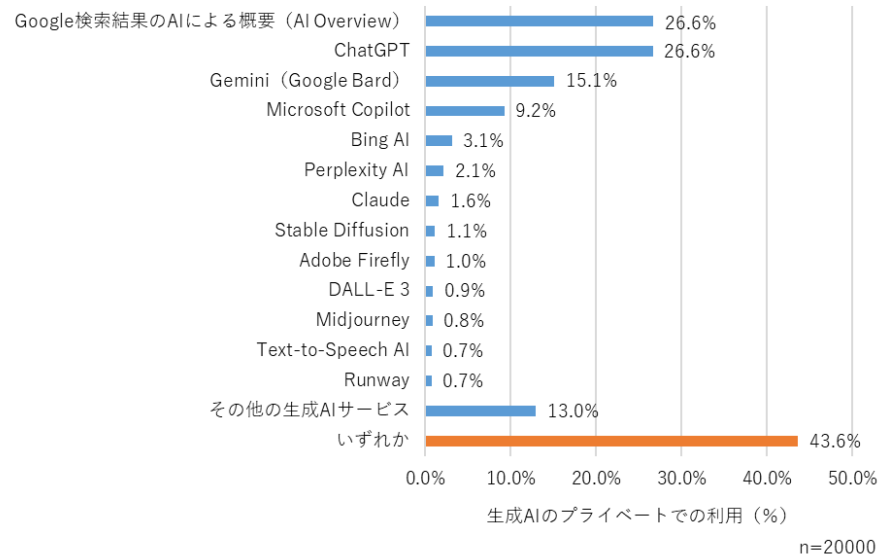
## 2. 生成AIの利用状況

### 生成AIサービスの利用率、仕事では24.2%、プライベートでは43.6%

- 仕事においては、いずれかの生成AIサービスを利用していると回答した人が24.2%と、約4人に1人が生成AIサービスを利用している（図表2.3）。
- 一方、プライベートでの生成AI利用率は43.6%であり、4割以上の人何らかの生成AIサービスを利用している（図表2.4）。
- つまり、全体としてはプライベートでの利用率の方が仕事での利用率よりも約1.8倍高い。



図表2.3 生成AIサービスを仕事で利用している割合

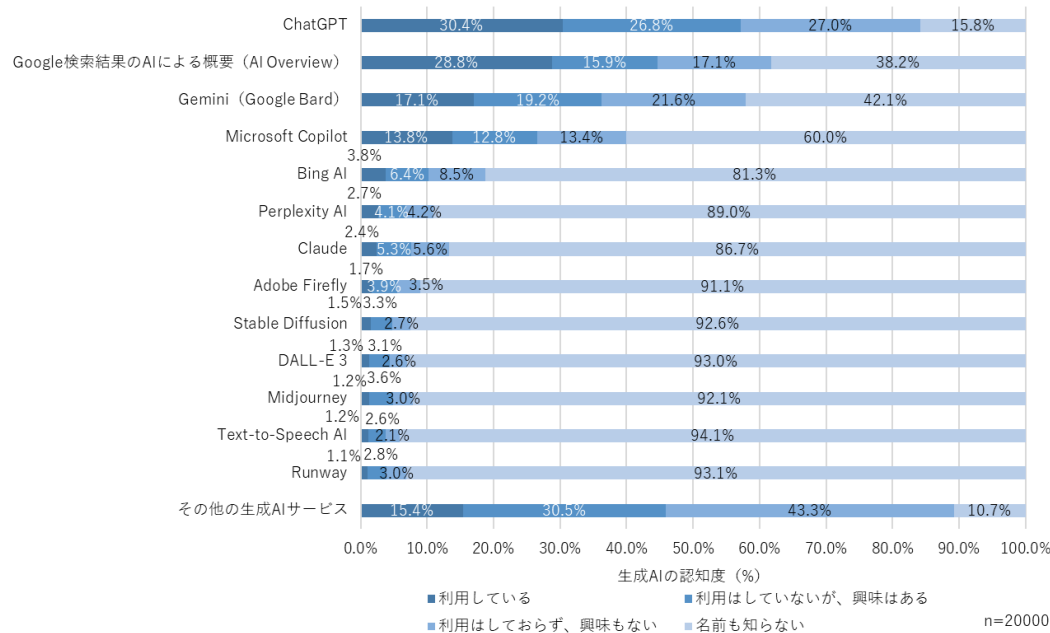


図表2.4 生成AIサービスをプライベートで利用している割合

## 2. 生成AIの利用状況

### サービス非利用者の関心から見える、生成AIサービスの広がり

- 各生成AIサービスについての利用有無だけでなく、「現在利用していないが興味がある」「現在利用していないし興味もない」の2つの選択肢も加え、興味関心の状況も踏まえた回答を収集（図表2.5）。
- 全体的に認知度が高い生成AIサービスに対して関心も集まっている。
- 「その他の生成AIサービス」への関心も大きく、生成AIサービスのすそ野の広さが示唆されている。

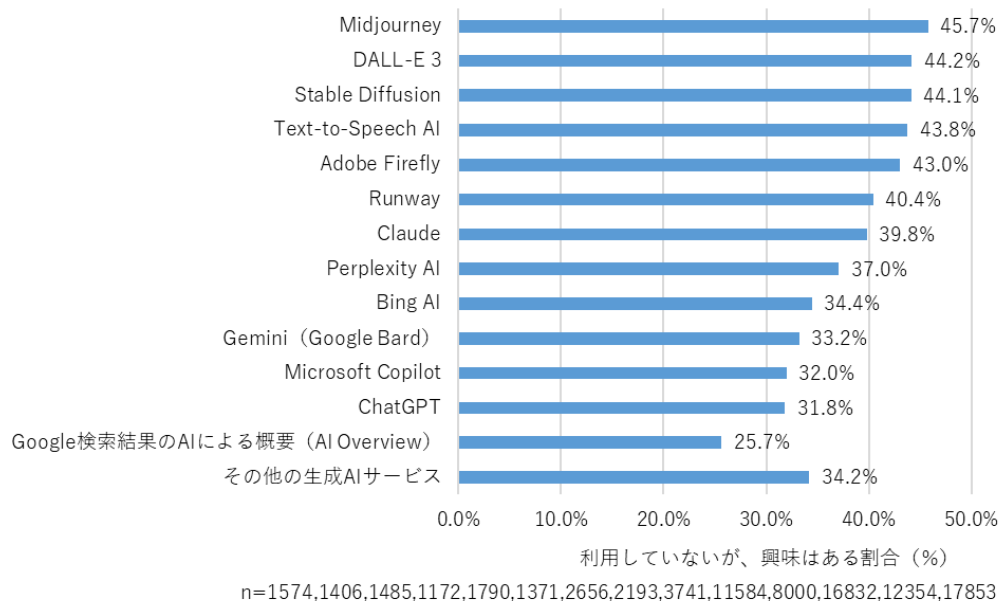


図表2.5 利用していないが興味ある人の割合

## 2. 生成AIの利用状況

### サービス認知者の次の関心は、画像生成AIに集まっている

- 各生成AIサービスの認知者に限定して、興味関心の状況を集計（図表2.6）。
- 各サービス認知者においては、画像生成AIに対しての関心が集まりやすい傾向にある。



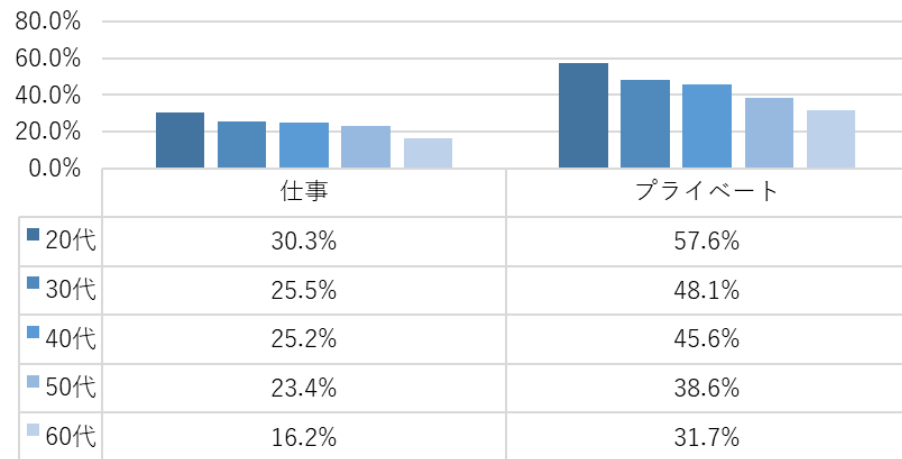
図表2.6 利用していないが興味ある人の割合

## 2. 生成AIの利用状況

### 生成AI利用率、若い世代ほど高い一方、年収ではU字型

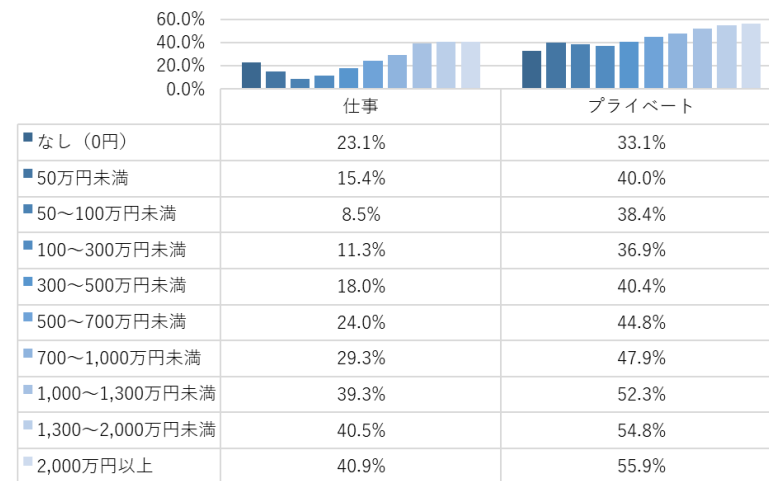
- いずれかのサービスを利用している人の割合を、仕事・プライベートのそれぞれで集計。
- 年代別には、仕事・プライベートともに右肩下がりとなっており、若い人ほど生成AIを利用している（図表2.8）。
- 世帯年収と利用率の関係は、一部例外はあるものの、U字型を描いている（図表2.9）。

生成AIの利用率（%）



n=14160,20000

生成AIの利用率（%）



n=14160,20000

図表2.8 いずれかのサービスを利用している人の割合（年代別）

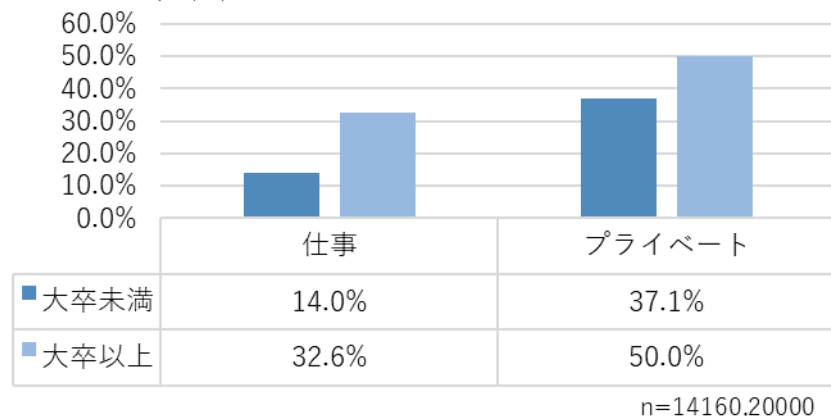
図表2.9 いずれかのサービスを利用している人の割合（年収別）

## 2. 生成AIの利用状況

### 生成AI利用率、大卒以上の学歴と大都市圏で高い傾向

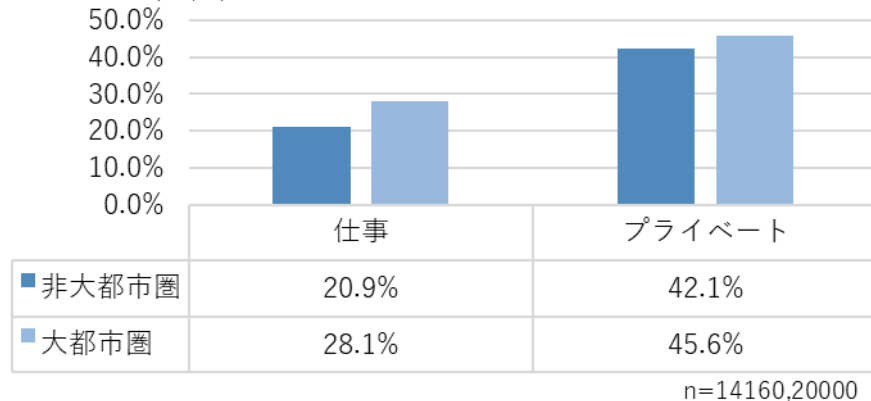
- 学歴別にみると、大卒以上の最終学歴を持つ人の方が生成AIを利用している傾向が、仕事・プライベート問わず見られており、特に仕事では2倍以上と顕著な差が開いている（図表2.10）。
- 居住地別にみると、プライベートでの利用については、大都市圏居住者の生成AI利用率の方が高いものの、約1.08倍とそこまで顕著な差とはなっていない（図表2.11）。
- 一方で、仕事での利用においては約1.34倍の差が開いており、居住地によって業務上の生成AI利用率には差が見られる。

生成AIの利用率（%）



図表2.10 いずれかのサービスを利用している人の割合（学歴別）

生成AIの利用率（%）

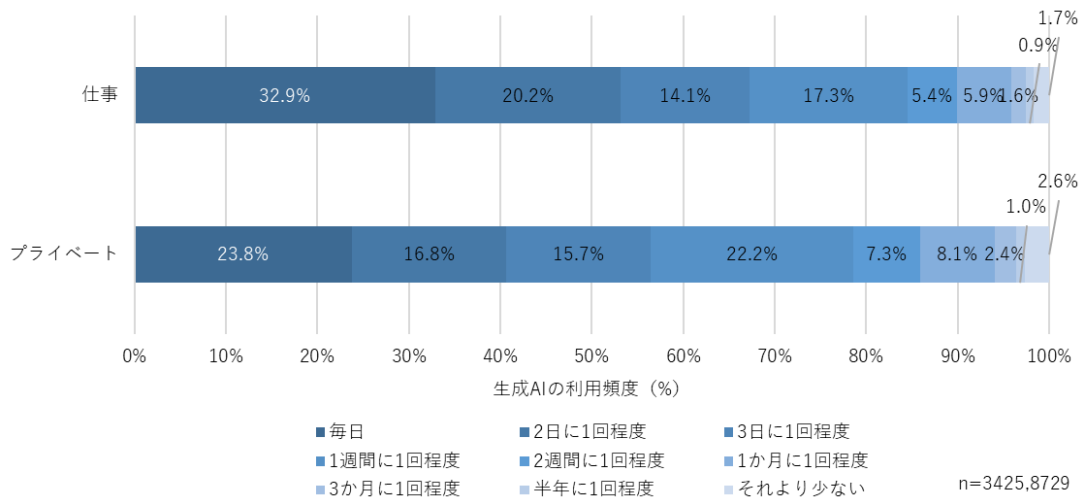


図表2.11 いずれかのサービスを利用している人の割合（居住地別）

## 2. 生成AIの利用状況

### 生成AIの利用頻度、半数以上の人が2～3日に1回以上利用

- 全体として仕事の利用頻度の方が高く、約3人に1人（32.9%）は毎日利用、2日に1回程度も合わせると、半数以上の人が高頻度で利用している（図表2.12）。
- プライベートでも、毎日利用している人が23.8%と最も多く、3日に1回以上利用している人が過半数を占める。
- Innovation Nippon 2024の結果と比較すると、仕事・プライベートを問わず利用頻度は増加しており、利用者の生活の中には生成AIが日常的な存在として溶け込んできている。

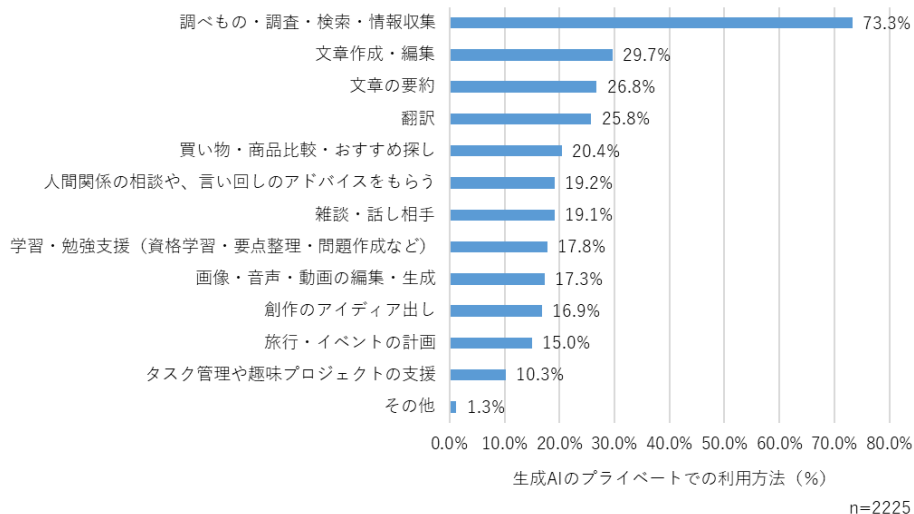


図表2.12 生成AIサービスの利用頻度

## 2. 生成AIの利用状況

### プライベートでは「調べもの・調査・検索・情報収集」での利用が圧倒的

- 「調べもの・調査・検索・情報収集」での利用が圧倒的であり、全体的に文章に関連するタスクが生成AIに任せられている（図表2.13）。
- Innovation Nippon 2024の結果と比較すると、プライベートでの生成AI利用者について、調べ物に生成AIを利用しているとする回答は前回の3割程度から今回は7割以上と2倍以上に増加している。



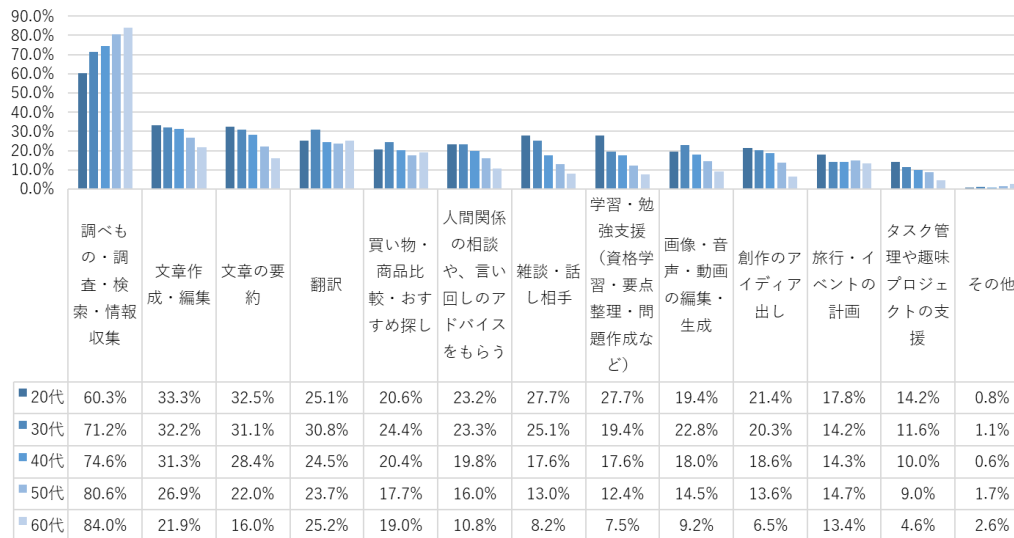
図表2.13 プライベートでの生成AIの利用方法

## 2. 生成AIの利用状況

### 調査タスクは年齢が上の世代ほど利用する一方、若い世代では多様化が進む

- 「調べもの・調査・検索・情報収集」については、年代が上がるほど利用率が向上している（図表2.14）。
- 一方で、他の利用方法については若い人ほど実施している傾向が見られる。ここからは、若い人の方が生成AIの使い道が多様化しており、調べ物や翻訳以外にも活用していることが示唆されている。

生成AIのプライベートでの利用方法（%）



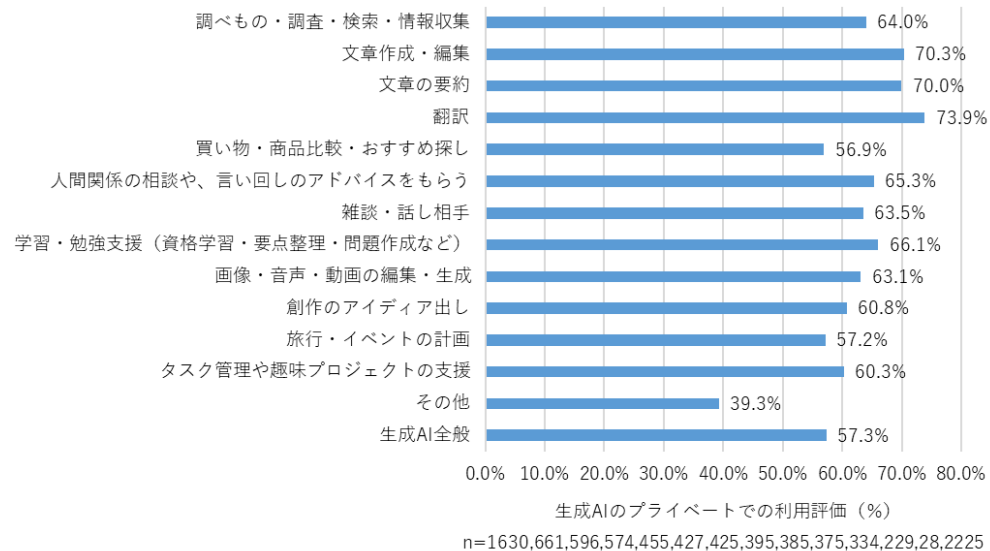
n=501,438,511,469,306

図表2.14 プライベートでの生成AIの利用方法（年代別）

## 2. 生成AIの利用状況

### プライベートでの利用において、約6割が生成AIを「役立つ」と評価

- 生成AI全般については57.3%の人が役立つと回答しており、6割近い利用者が生成AIを役立つと評価（図表2.）。
- 翻訳をはじめ、文章そのものに関する回答に対して、利用者は役立つと評価しやすい傾向にある。

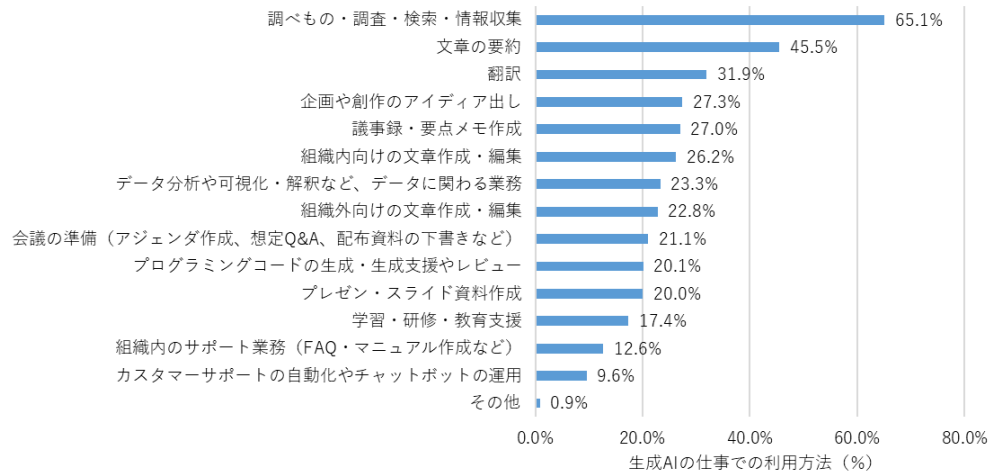


図表2. プライベートでの生成AIの利用方法別評価

## 2. 生成AIの利用状況

### 仕事でも「調べもの・調査・検索・情報収集」での利用が圧倒的

- 圧倒的に「調べもの・調査・検索・情報収集」で生成AIは利用されており、利用者における65.1%の人がこの利用方法を実施（図表2.17）。
- プライベート同様、文章に関連するタスクを生成AIに任せていることがわかる。
- ただし、仕事における利用方法には一部変化が見られ、Innovation Nippon 2024で多かった文章の作成支援よりも、既存の文章を整理する方向性で活用が進んでいる。



図表2.17 仕事での生成AIの利用方法

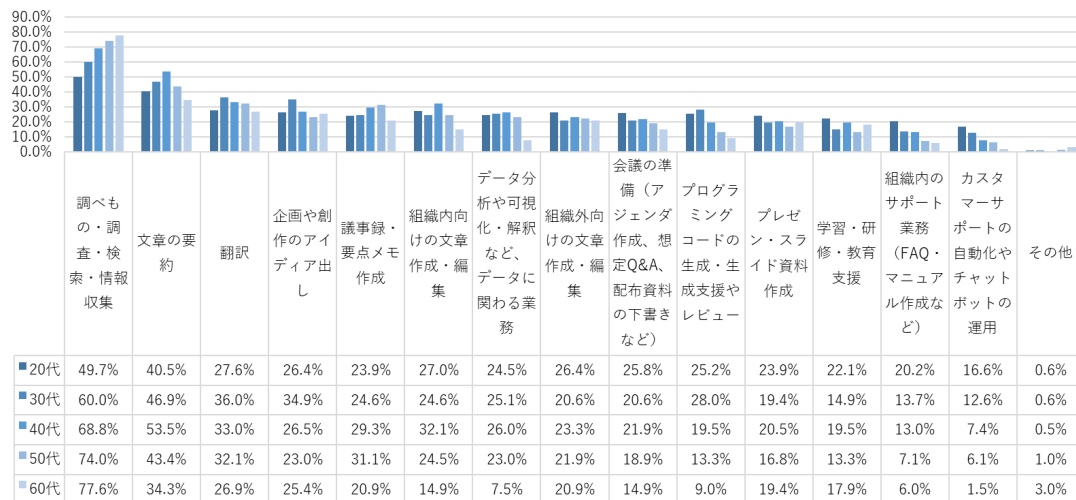
n=816

## 2. 生成AIの利用状況

### 調査タスクは年齢が上の世代ほど利用する一方、若い世代では文章やプログラミングでの利用も進む

- プライベート同様、仕事においても年代によって生成AIの利用方法には差が見られる（図表2.18）。
- 「調べもの・調査・検索・情報収集」は、プライベートと同様に、年代が高いほど利用率が上がる傾向。
- 一方で、他の利用方法には異なる傾向が見られる。文章の要約や翻訳など文章に関連する業務については、30～40代の利用傾向が20代のそれを上回っているほか、プログラミングやサポート業務では若い人ほど利用している傾向にある。

生成AIの仕事での利用方法（％）



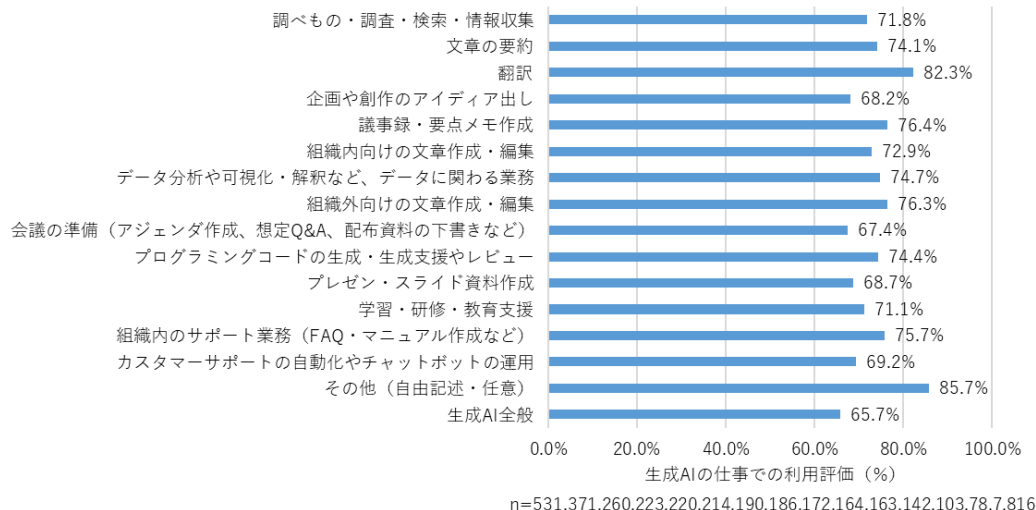
n=163,175,215,196,67

図表2.18 仕事での生成AIの利用方法（年代別）

## 2. 生成AIの利用状況

### 仕事での利用において、約65%が生成AIを「役立つ」と評価

- 生成AI全般については65.7%の人が役立つと回答しており、生成AIに対する評価はプライベートよりも高い傾向にある（図表2.19）。
- 翻訳をはじめとした文章そのものに関する回答に対して、利用者は役立つと評価しやすい傾向がわかる。
- プライベートと違い「その他」が最多となっており、ここに挙げた選択肢以外で利用している場合、評価が高い傾向にある。



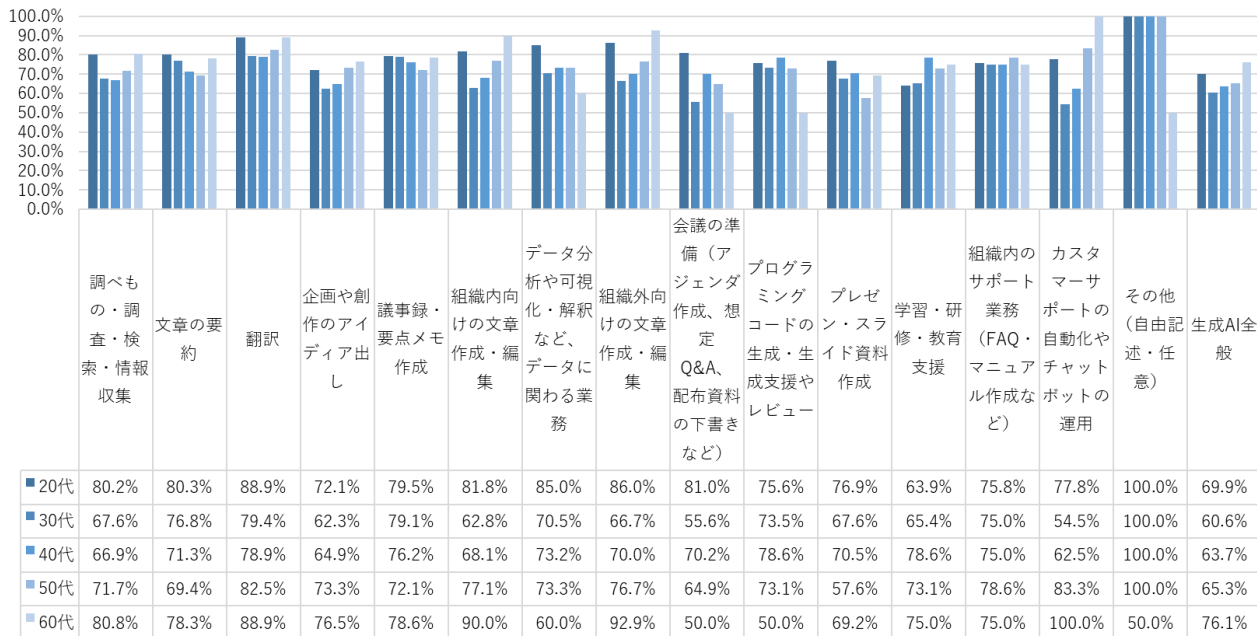
図表2.19 仕事での生成AIの利用方法別評価

## 2. 生成AIの利用状況

### 仕事での生成AI利用の評価、年代別にはU字型

- 生成AIに対する評価と年代の関係はU字型となっており、仕事での生成AI利用は中年代層からの評価が低い（図表2.20）。

生成AIの仕事での利用評価（%）



n=531,371,260,223,220,214,190,186,172,164,163,142,103,78,7,816

図表2.20 仕事での生成AIの利用方法別評価（年代別）

# 3

## 生成AIリテラシー

### 3. 生成AIリテラシー

#### リテラシーテストの概要

- 以下のテスト（複数回答可、排他選択肢含む）を出題し、完答数を0～10点で生成AIリテラシーとした。

図表3.1 生成AIリテラシー調査項目

問番号	テーマ	番号	項目	正誤	問番号	テーマ	番号	項目	正誤
1	生成AIの機能	1	生成AIは、入力されたキーワードに基づいて、先に用意された回答から適切な回答を提供する	正解	6	生成AIを用いて色々なコンテンツを作成する際、著作権やパブリシティ権の侵害を予防するための指示	1	A社の広告ポスターが素晴らしいので、似ているポスターを作成して下さい	正解
		2	生成AIは、多種多様なメディア（音声、テキスト、画像）を生成できる				2	漫画Bが今後どうなるのか、現状から予想できる続編を書いてください	
		3	生成AIは、ユーザーの質問の意図を自動的に理解し、最適な回答を提供する				3	女優Cが水着を着ているイラストを生成してください	
		4	生成AIは、感情を理解し、ユーザーの感情状態に合わせて回答する				4	新たな化粧品を販売するための、キャッチコピーを考えて下さい	
2	生成AIが生成した誤った情報に騙されなための行動	1	生成AIに、「この情報は真実ですか？」と質問する	正解	7	生成AIを活用する時の倫理	1	生成AIに過度に依存しないように気を付ける	正解
		2	提供された情報は、常に批判的に疑って考えるようにする				2	SNS上で犯行予告をするための文章を生成AIに出力してもらう	
		3	提供された情報の出典や、その情報に関する専門家の意見を自分自身でも確認する				3	生成AIを使うと思考力が落ちるので、勉強や仕事には一切使わない	
		4	生成AIは誤った情報を提供しないので、疑う必要はない				4	生成AIを使ったサイバー犯罪や特殊詐欺を行わない	
3	生成AIに入力すべきでない情報	1	友人や家族の住所やメールアドレス	正解	8	画像生成AIで回答の偏見（性差）を軽減するため、指示を工夫する方法	1	どのような企業なのか、どのような状況のイラストなのかの情報を追加する	正解
		2	業務上入手した顧客情報				2	男女両方の社長の存在を考慮したイラストを生成するように求める	
		3	職場やクラスの名簿を撮影した写真				3	「社員に信頼される社長」など、性別や年齢などに依存しない特徴を追加の情報として提供する	
		4	個人の趣味や嗜好				4	具体的に指示を出すことで偏見が増してしまうため、あいまいな指示を出すようにする	
4	生成AIでビジネスメールを作成する際に気を付けること	1	生成AIは違和感のない文章を作成するため、特にチェックせずそのまま使ってよい	正解	9	生成AIの特性	1	生成AIを使うためには、一般的なプログラムと同じように専用の言語を学ぶ必要がある	正解
		2	自分自身の氏名や所属は、他人の個人情報ではないため生成AIに入力してよい				2	生成AIに対して同じテーマでイラスト作成を依頼しても、同じイラストを描いてくれるとは限らない	
		3	職務内容や顧客情報は機密情報に当たるので、生成AIには入力しない				3	生成AIはデータベースを基に正しい情報を出力するので、ビジネス文章にもそのまま利用できる	
		4	AIによって生成されたメールの文章は確認し、違和感のある箇所は修正する				4	生成AIに英語の出力をさせるためには、英語で指示を出す必要がある	
5	画像生成AIで作った商品の広告イラストが、有名な広告デザインに似ていた際の対応	1	生成AIが作ったイラストなので問題はないため、そのまま使う	正解	10	生成AIに旅行のプランを立ててもらったとき、その後の適切な行動	1	生成AIが提案した観光地の公式ウェブサイトを訪れて、最新の情報や開場時間を確認する	正解
		2	法的な問題に発展するリスクを避けるために、新しくイラストを生成しなおす				2	生成AIが提供したプランの時間は正確なので、追加の確認や調整は行わずに旅行を行う	
		3	既存広告デザインの権利者から許諾を得たうえで利用する				3	AIが提案した観光地は人気も考慮しているため、他の人の意見やレビューは参照しない	
		4	既存の広告デザインとは全く異なるものとなるよう、大きく変更したデザインを利用する				4	提案されたレストランや宿泊施設が本当に存在しているか、公式ウェブサイトなどで確認する	

作成の参考：総務省. (2024). 生成AIはじめての一步～生成AIの入門的な使い方と注意点～.

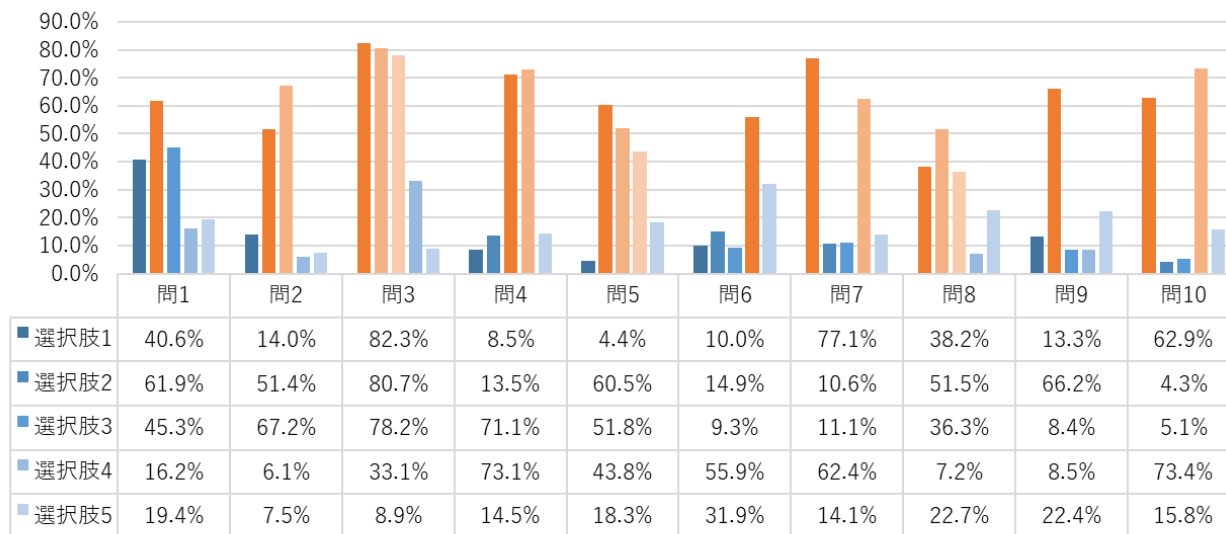
[https://www.soumu.go.jp/use\\_the\\_internet\\_wisely/special/generativeai/](https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/special/generativeai/)

### 3. 生成AIリテラシー

#### 正解の選択率は高い一方、生成AIのシステム理解不足や情報漏洩に対する過剰な意識も

- 選択肢別の選択率としては、全体的に正解の問が選択されている傾向が見られる（図表3.2）。
- 一方、不正解の中で選択率の高い選択肢からは、生成AIのシステムそのものに対する理解度の低さが見られる（問1の選択肢1・3）ほか、入力して問題ない情報も含めて情報漏洩に対する意識が過剰に高い（問3の選択肢4）可能性が示唆される。

選択肢別の選択率（％）



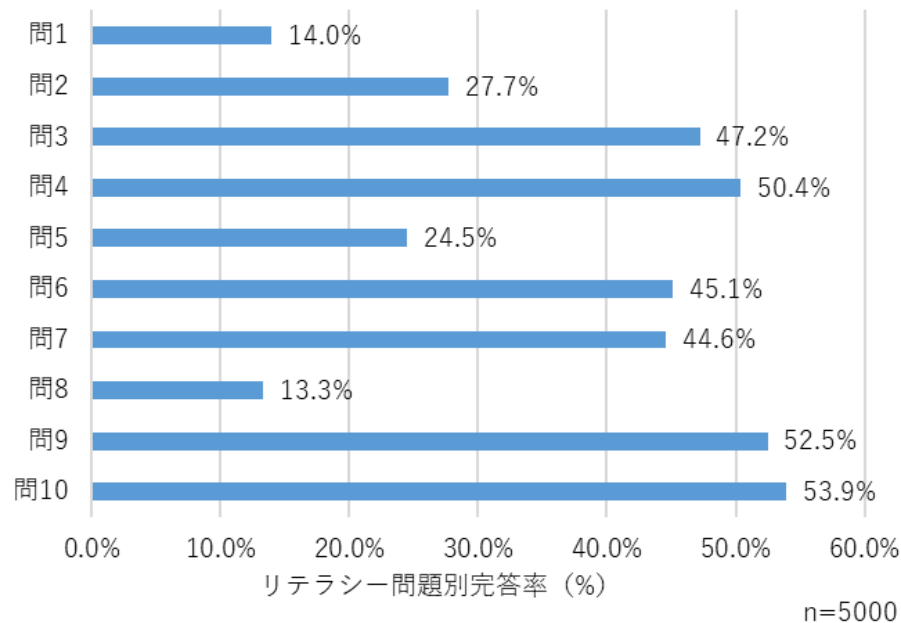
n=5000

図表3.2 問題別にみた各選択肢の選択割合（オレンジが正解）

### 3. 生成AIリテラシー

#### 生成AIの実用における注意点の認知は高い一方、バイアスや著作権に対する知識は低い

- 問10・9・4の順に正答率が高く、生成AIを実用する上での注意点については正しい認知がなされている傾向にある（図表3.3）。
- 一方で、画像生成AIを利用した際のバイアスや著作権に対する知識の低さ（問5・8）が浮き彫りとなっている。
- また、生成AIというシステムや使われている技術に対する理解度の低さ（問1）も確認できる。
- IN2024の結果と比較しても、生成AIのシステムとしての基礎知識やフェイク情報、著作権侵害に対するリテラシーの向上は認められない。

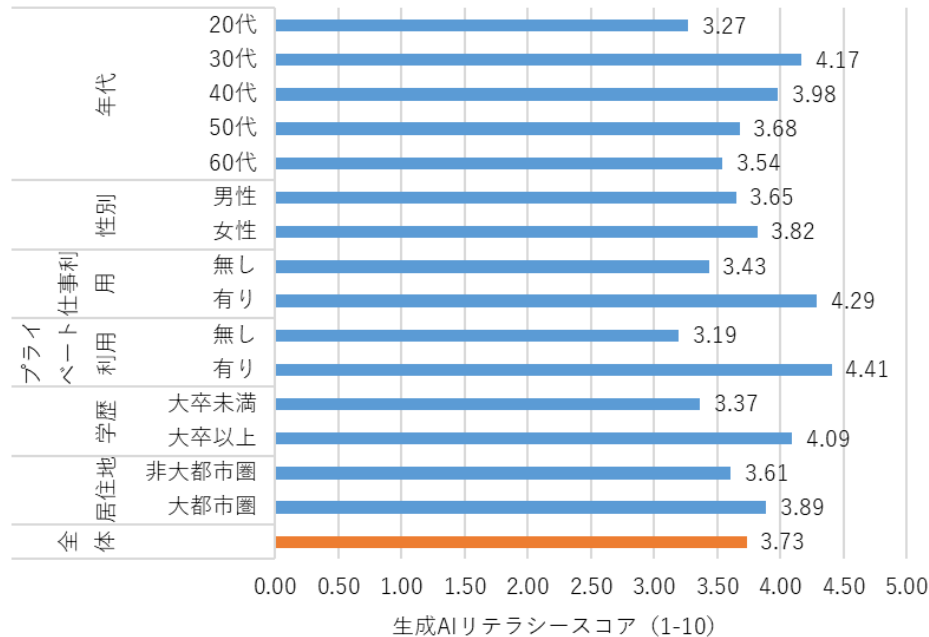


図表3.3 リテラシー問題別の完答率

### 3. 生成AIリテラシー

#### 生成AIリテラシー、20代が最低、非利用者は低い傾向。最終学歴や居住地によっても隔たり

- 年代別には30代のスコアが最も高い山型の分布となっている。年齢が上の層だけでなく、20代の正答率が最も低いことは課題である（図表3.5）。
- 生成AIを利用していない人の方が、生成AIに対するリテラシーも低い。
- 最終学歴によっても生成AIに対する知識に大きな隔たりが見られる。
- 居住地別には、大都市圏居住者の方が生成AIに対する正しい知識を保有していることがわかる。



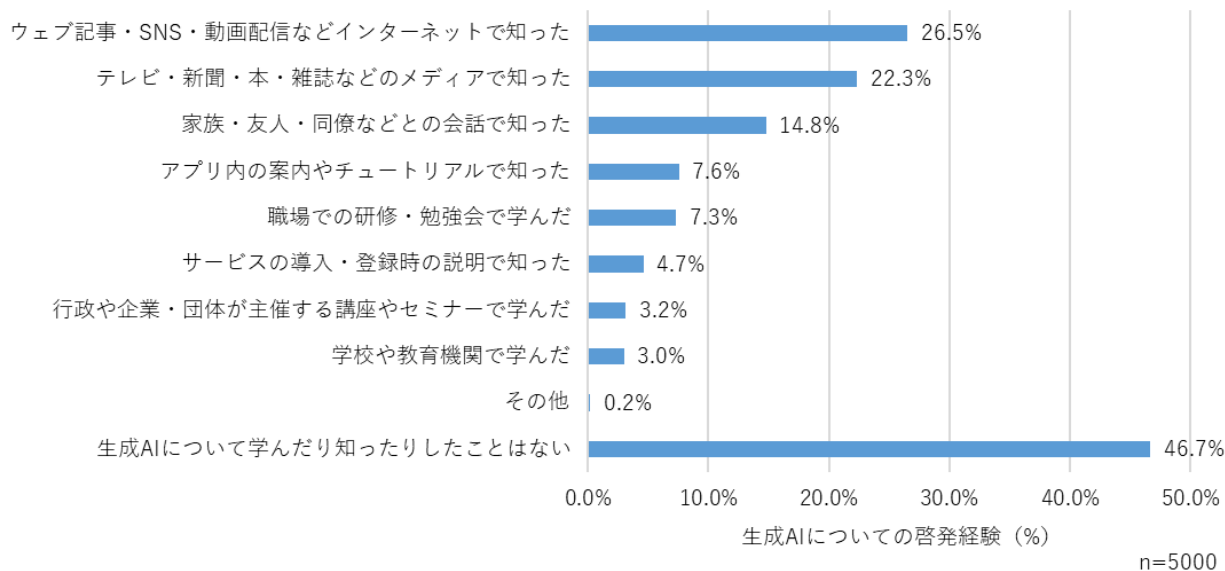
n=5000

図表3.5 生成AIリテラシースコア（属性別）

### 3. 生成AIリテラシー

#### 生成AIに関する啓発経路はインターネットが主も、半数近くが未経験

- 「ウェブ記事・SNS・動画配信などインターネットで知った」と回答した人が26.5%と多く、次いで「テレビ・新聞・本・雑誌などのメディアで知った」（22.3%）、「家族・友人・同僚などとの会話で知った」（14.8%）と続いた（図表3.8）。
- 一方、「生成AIについて学んだり知ったりしたことはない」は46.7%と、半数近い人が啓発未経験である。



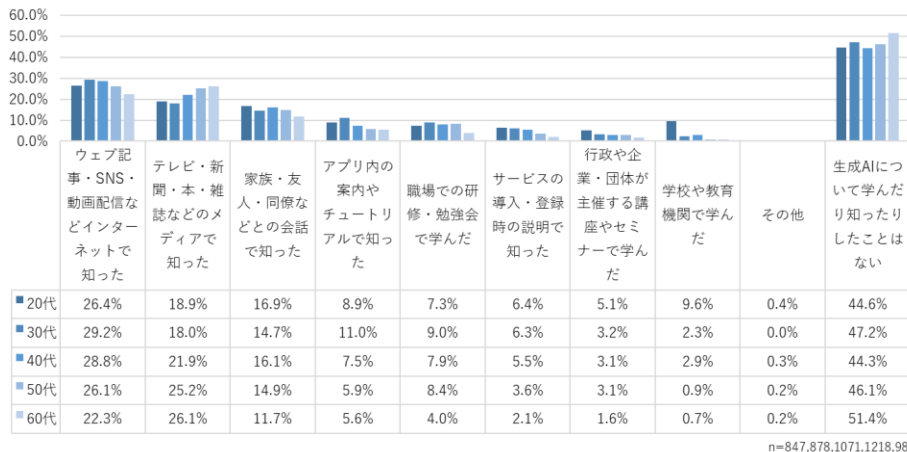
図表3.8 生成AIについての啓発経路

### 3. 生成AIリテラシー

#### 若い世代はインターネット、上の世代はメディアでの啓発が多く、大都市圏の方が経験率が高い

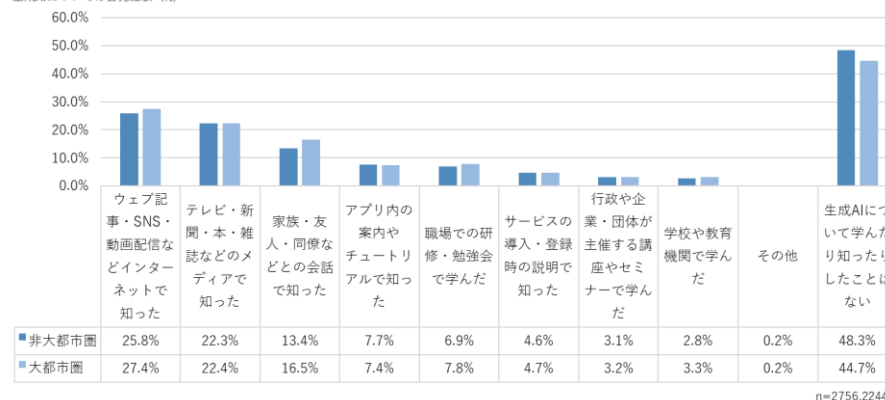
- 年代別に極端な傾向は見られないが、インターネットで知った人は30代を中心としており、メディアで知った人は年代が上の人ほど多い傾向が見られる（図表3.9）。
- また、60代については啓発経験がない人が半数を超えている。
- 居住地別には、非大都市圏の方が、生成AIに対する啓発経験が大都市圏に住んでいる人よりも3.6%少ない（図表3.10）。

生成AIについての啓発経験 (%)



図表3.9 生成AIについての啓発経験（年代別）

生成AIについての啓発経験 (%)

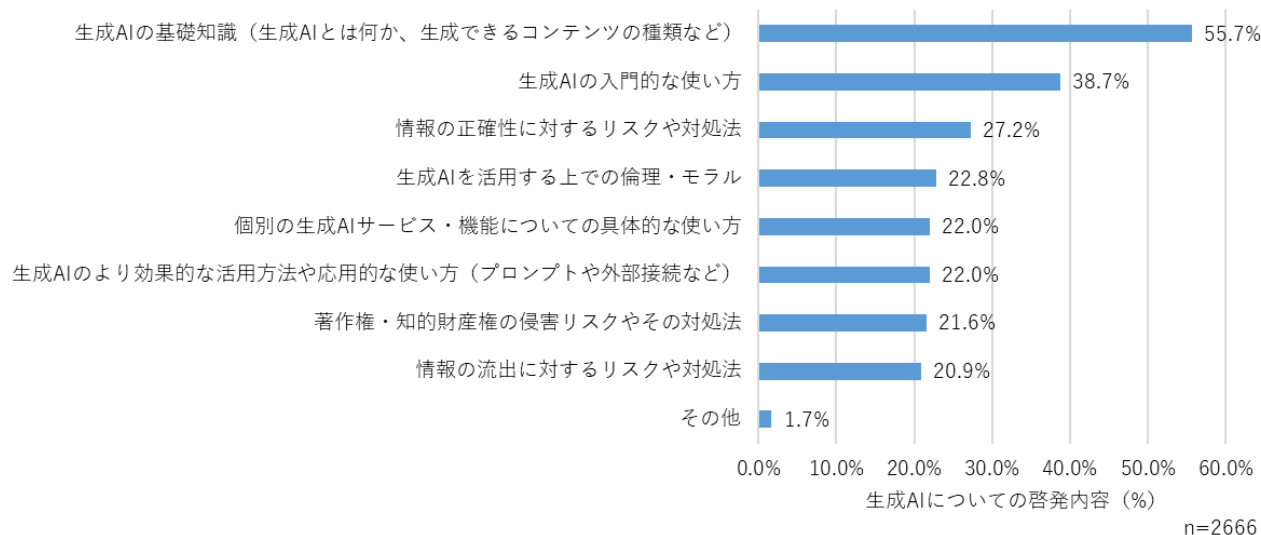


図表3.10 生成AIについての啓発経験（居住地別）

### 3. 生成AIリテラシー

#### 啓発内容は生成AIの基礎知識が半数以上、リスクやモラルの啓発には遅れ

- 啓発経験としては、「生成AIの基礎知識（生成AIとは何か、生成できるコンテンツの種類など）」が55.7%と多く、啓発経験者の半数以上はこの内容について学んでいる（図表3.11）。
- ほかにも、生成AIに対する基礎知識や使い方に対しての啓発は比較的行われているものの、リスクやモラルについての啓発は遅れがみられる。

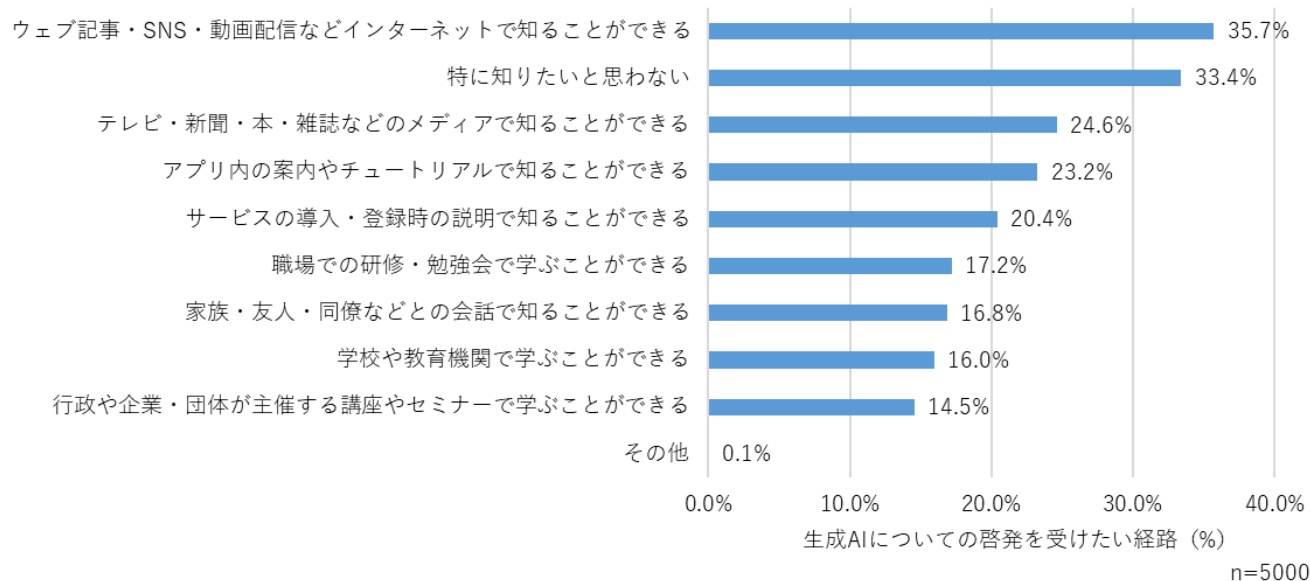


図表3.11 生成AIについての啓発を受けた内容

### 3. 生成AIリテラシー

#### 啓発経路にはインターネットやメディアに期待、ただし3人に1人が不要と考えている

- 啓発の経路としては、インターネットを中心に、メディアでの啓発も求められている（図表3.12）。
- ただし、3人に1人が生成AIに対する啓発の必要性を感じていないことには注意が必要である。



図表3.12 生成AIについての啓発を受けたい経路

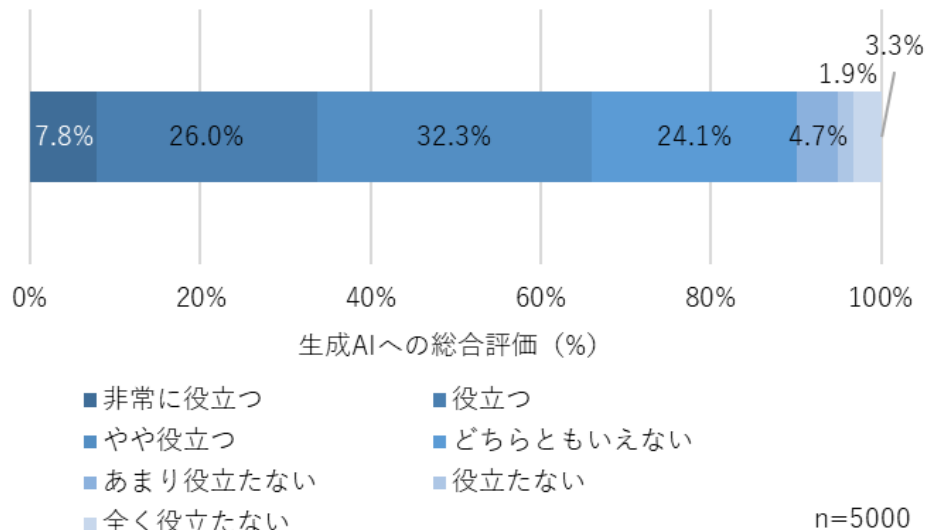
# 4

## 生成AIへの評価

## 4. 生成AIへの評価

### 6割以上の人が生成AIは総合的に「やや役立つ」以上の評価

- 「やや役立つ」以上の回答をした人が66.1%と6割以上を占め、全体的に生成AIは役立つものであると人々に評価されている（図表4.1）。
- ただし、評価の中で最も大きいものは「やや役立つ」の32.3%であり、極端に高い評価をしている人が多いわけではないことには留意すべきである。

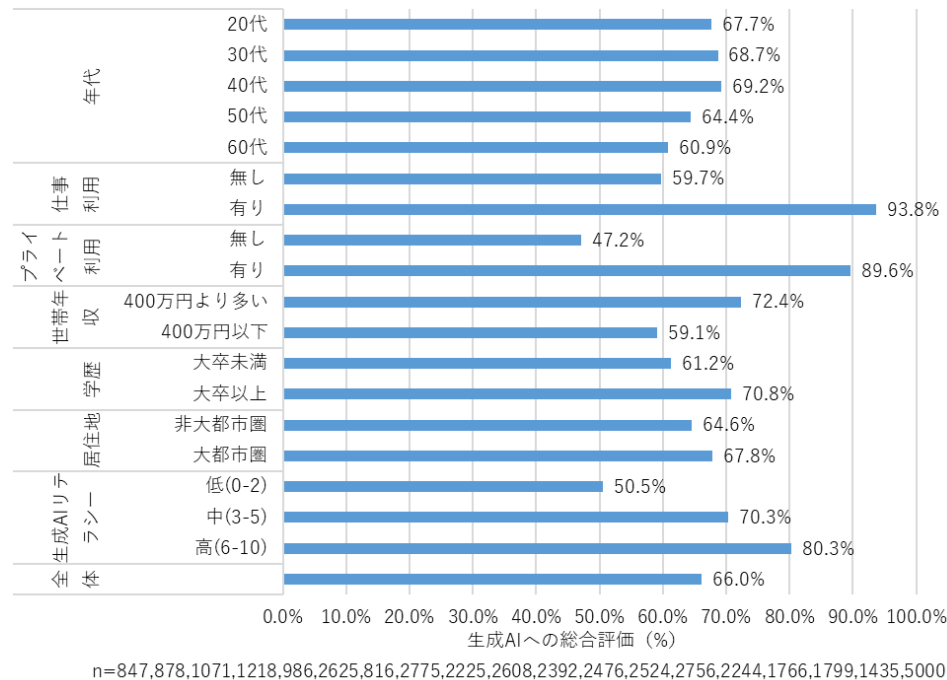


図表4.1 生成AIに対する総合的な評価

## 4. 生成AIへの評価

### 年代別には50代以上で評価低下、利用有無やリテラシー、その他属性によっても差がみられる

- 年代別には、20代~40代が高い分布となっており、50代以上の評価が低い傾向にある（図表4.2）。
- 利用状況別には、仕事・プライベートを問わずに利用者における評価が高くなっており、利用している人としていない人での評価の差が顕著にみられる。
- その他の属性についても、年収が高い、学歴が大卒以上、大都市圏居住の方が生成AIに対する総合的な評価は高い傾向にある。
- また、リテラシースコア別にもスコアが高い人ほど生成AIに対する評価が高い。

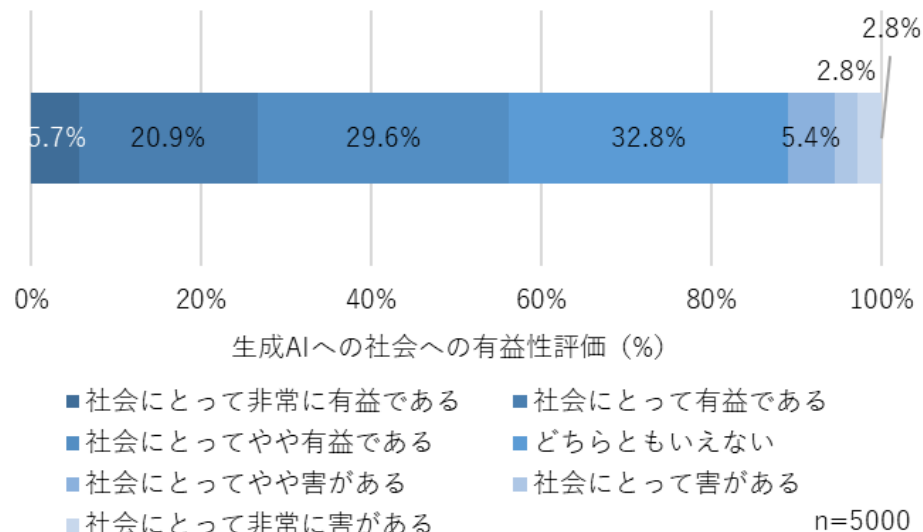


図表4.2 生成AIに対する総合的な評価（「やや役立つ」以上の割合）

## 4. 生成AIへの評価

### 5割以上の人々が生成AIの社会的有益性を前向きに評価

- 「社会にとってやや有益である」以上の回答をした人が56.2%と5割以上を占めている一方、「社会にとってやや有害である」以下の回答をした人は11.0%で1割程度となっている（図表4.3）。
- 全体的に、生成AIは社会的に有益なものであると人々に前向きに評価されている。

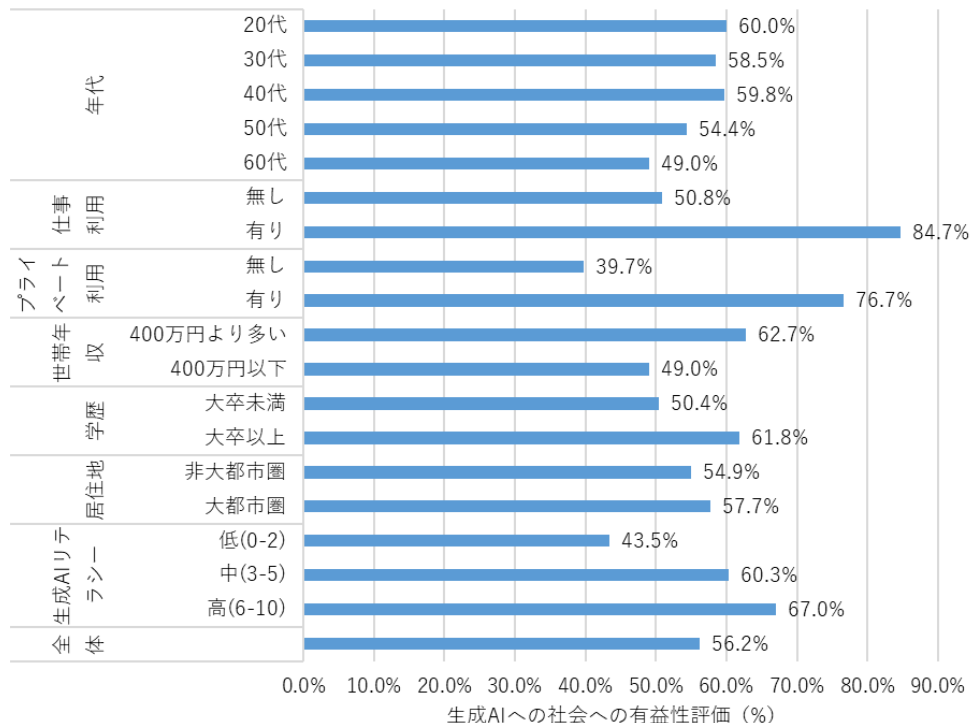


図表4.3 生成AIに対する社会的有益性の評価

## 4. 生成AIへの評価

### 社会的有益性の評価についても、総合的な評価と同様の傾向

- 年代別には、20代～40代の評価が高く、50代以上の評価の方が低い傾向にある（図表4.4）。
- 利用状況別には、仕事・プライベートを問わずに利用者における評価が高くなっており、約8割の利用者が「社会的にやや有益である」以上の評価をしている。
- その他の属性についても、年収が高い、学歴が大卒以上、大都市圏居住の方が生成AIの社会的な有益性への評価は高い傾向にある。
- また、リテラシースコア別にもスコアが高い人ほど生成AIに対する評価が高い傾向が見られる。



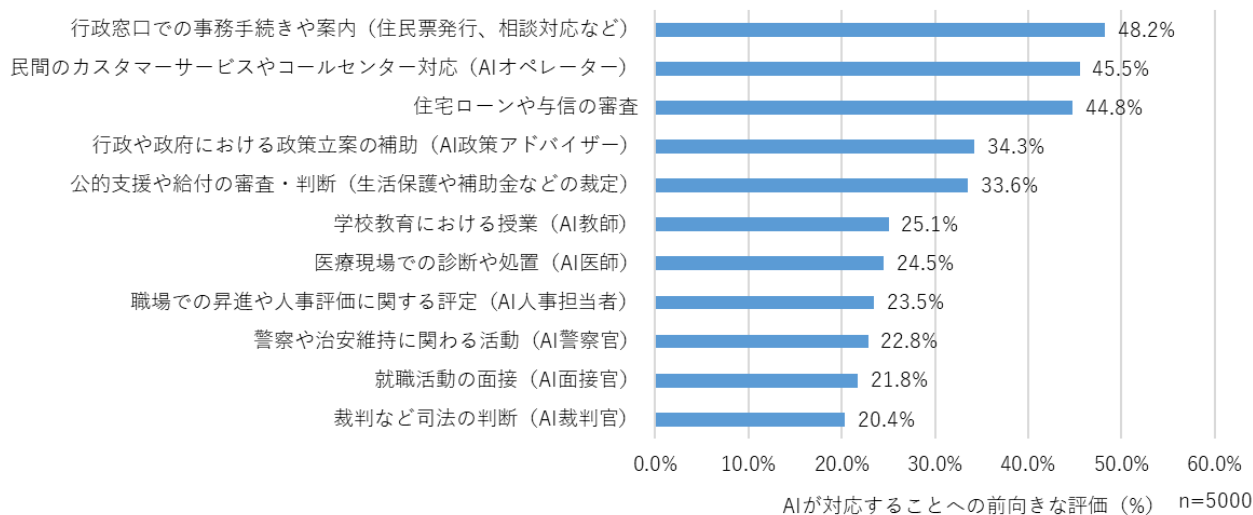
n=847,878,1071,1218,986,2625,816,2775,2225,2608,2392,2476,2524,2756,2244,1766,1799,1435,5000

図表4.4 生成AIに対する総合的な評価（「社会にとってやや有益である」以上の割合）

## 4. 生成AIへの評価

### 生成AIの対応について、窓口やオペレーターには前向きも、専門性が高い領域には後ろ向き

- 生成AIが対応することについて前向きに評価している人の割合を集計（図表4.5）。
- 行政窓口での事務的な手続きに対して最も評価が高く、民間のサービスにおけるAIオペレーターに対しても前向きである。
- 一方で、裁判官のような専門性が高く、かつ他者の人生に大きな影響を与える職業や面接・人事などの判断が求められる場面においては、AI対応への評価が低い傾向にある。

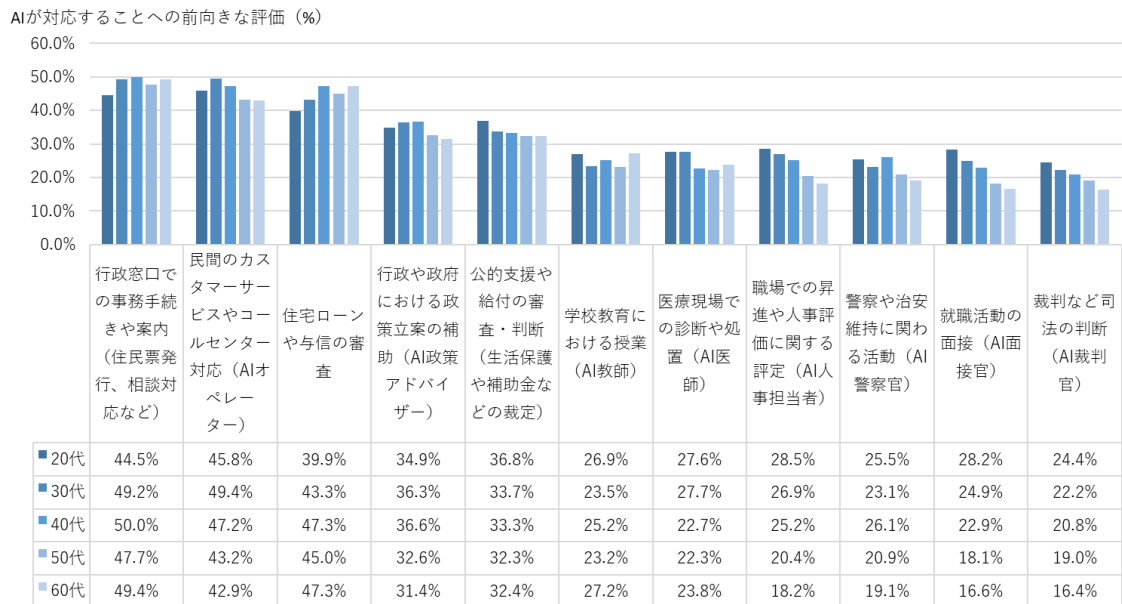


図表4.5 AIが対応することへの評価

## 4. 生成AIへの評価

### AIの対応するタスクの特性によって年齢の傾向が逆転

- 年齢別に集計すると、専門性の高い職業については年齢が高い人ほど受容度が低いが、「行政窓口での事務手続きや案内」や「住宅ローンや与信の審査」などの事務的な内容については年齢別の受容傾向が逆転する（図表4.6）。



n=847,878,1071,1218,986

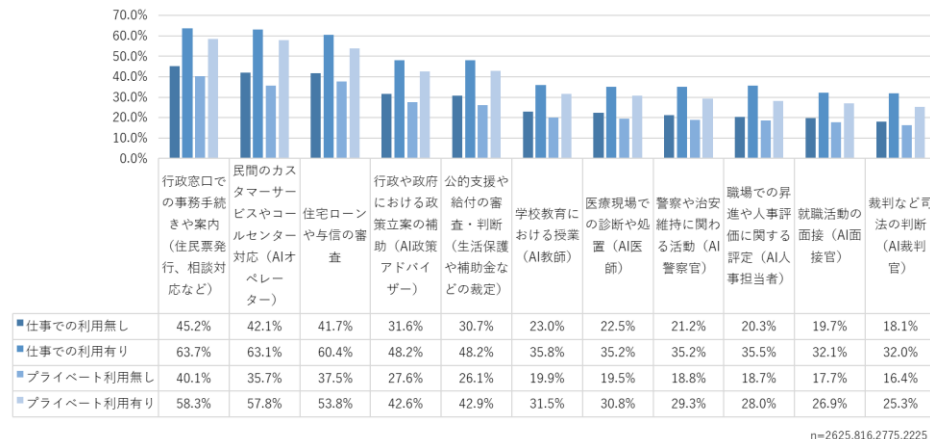
図表4.6 AIが対応することへの評価（年代別）

## 4. 生成AIへの評価

### 生成AIの対応は利用者ほど受容しやすいが、リテラシーの高さによっては逆転も

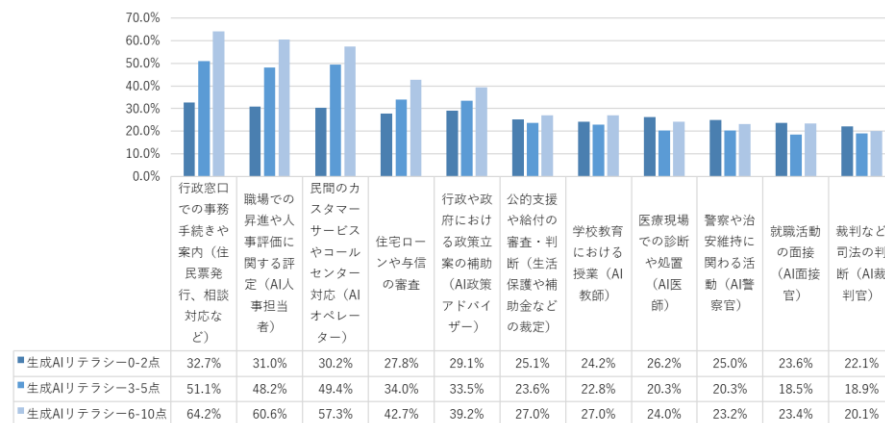
- 仕事・プライベートを問わず、生成AIを利用している人ほどAIが対応することへの評価は高い（図表4.7）。
- ただし、生成AIのリテラシーが高い人ほど、事務的な対応について生成AIの受容度が高い一方、専門性や機微性が高い領域においてはこれが逆転し、AIが対応することについてリテラシーが低い人の受容度を下回る（図表4.8）。
- 生成AIの知識が高まることで、専門性が高く、かつ他者の人生に大きな影響を与えるような項目においては、AIが対応することへのリスクを感じて評価が低くなっていることが示唆される。

AIが対応することへの前向きな評価（%）



図表4.7 AIが対応することへの評価（生成AI利用別）

AIが対応することへの前向きな評価（%）

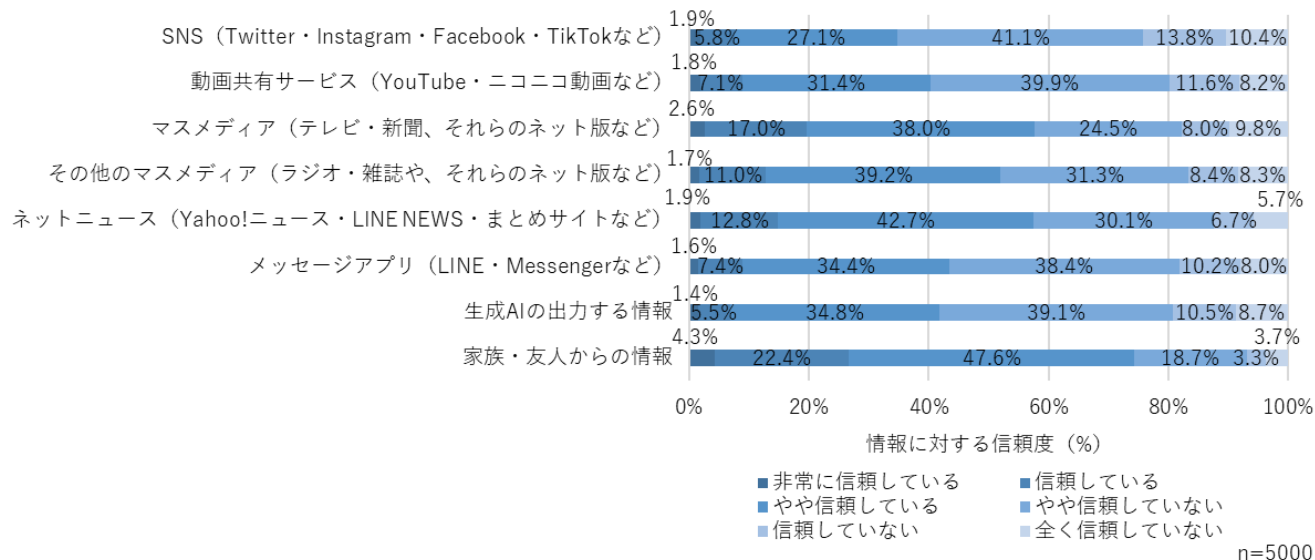


図表4.8 AIが対応することへの評価（生成AIリテラシー別）

## 4. 生成AIへの評価

### 生成AIの情報を信頼できると考えている人は4割程度、非常に信頼している人は特に少ない

- 情報の信頼性として、生成AIの情報を信頼できると考えている人は4割程度であり、SNSと動画共有サービスに続き下から3番目であった（図表4.9）。
- また、「非常に信頼している」と回答した人の割合は、生成AIが最も低く1.4%となっており、信頼している人の中でも、絶対的な信頼をしている人は少ない傾向にある。

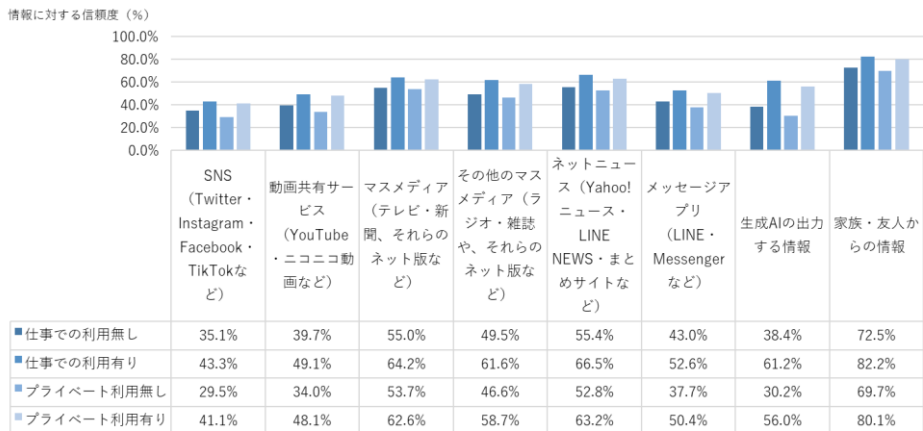


図表4.9 各情報源に対する信頼性評価

## 4. 生成AIへの評価

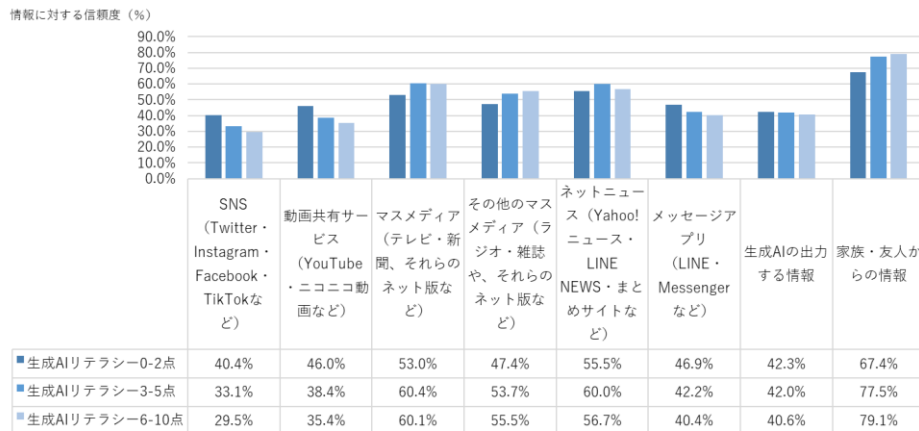
### 生成AI利用者は全体的に情報を信頼する傾向、特に生成AIの出力する情報で顕著な差

- 全ての項目において、生成AIを利用している人の方が仕事・プライベートを問わず情報を信頼している（図表4.11）。
- この差は特に「生成AIの出力する情報」で顕著となっており、利用の有無で20%以上の差が見られる。
- 生成AIリテラシーが高い人ほど、SNSや動画共有サービスを信頼しておらず、マスメディアや家族・友人からの情報を信頼している傾向にある（図表4.12）。
- 一方で、生成AIの出力する情報については、極端に大きな差とはなっていない。



n=2625,816,2775,2225

図表4.11 各情報源に対する信頼性評価（生成AI利用別）



n=1766,1799,1435

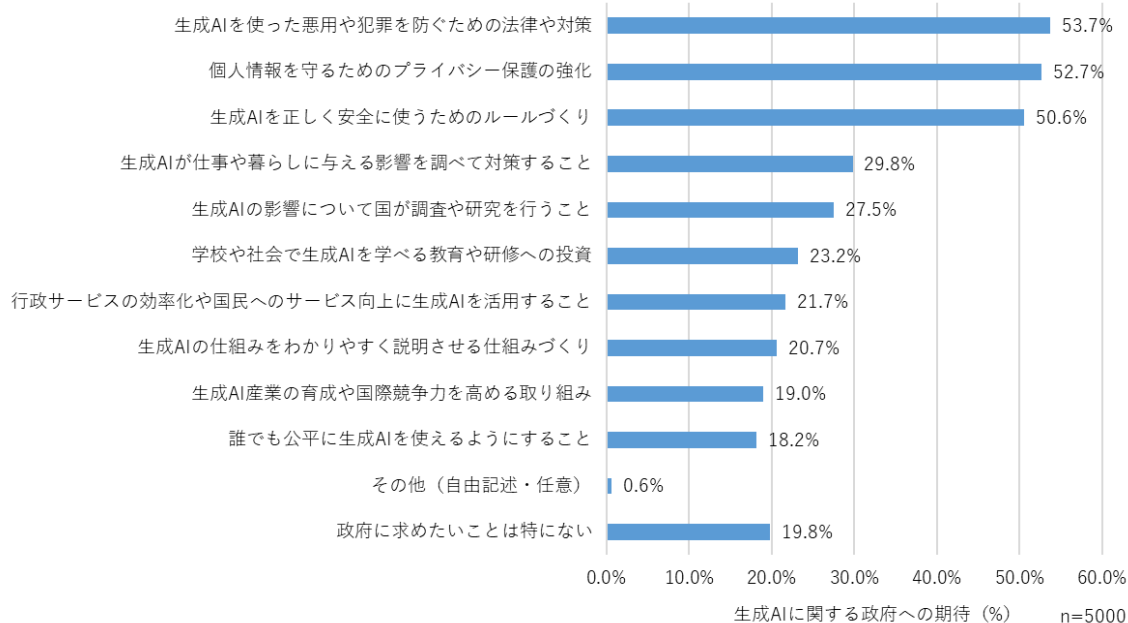
図表4.12 各情報源に対する信頼性評価（生成AIリテラシー別）

# 5 政府・企業への要望

## 5. 政府・企業への要望

### 生成AIに関して、政府には安全な利用のための法律やルールの制定が求められている

- 政府には生成AIを用いた犯罪を防ぎ、人々が安全に利益を享受するための法律やルールの制定が求められている（図表5.1）。
- 一方で、調査や研究、投資、競争力といった文脈については、政府に対する期待としては低い傾向にある。



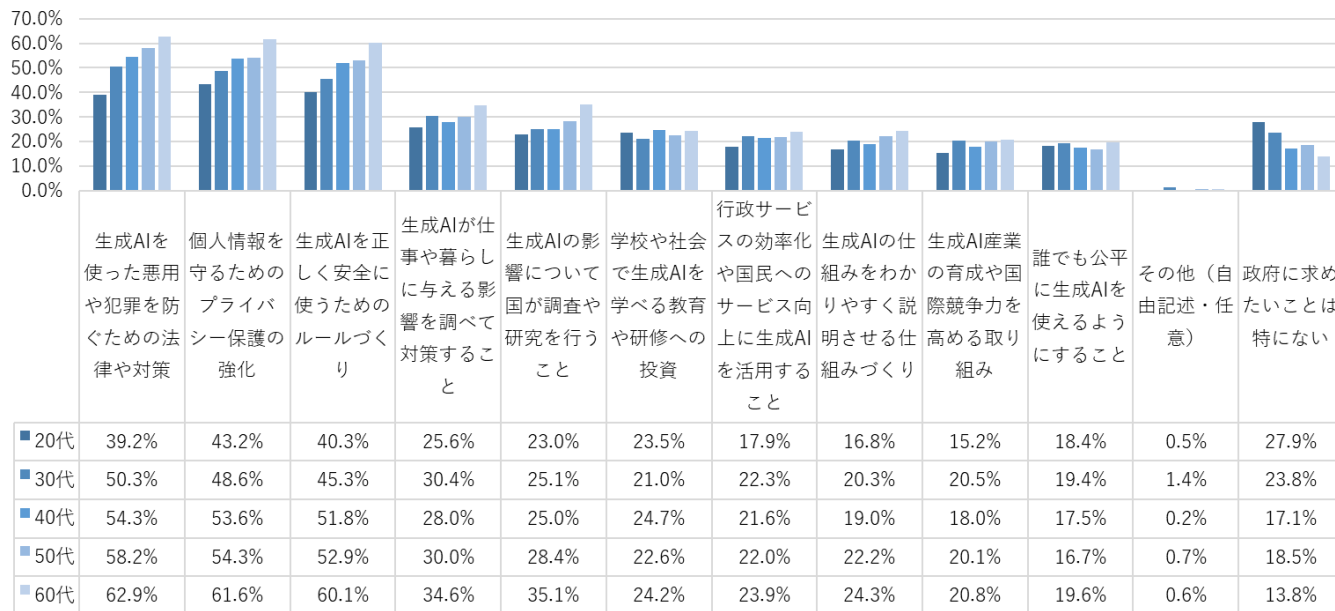
図表5.1 生成AIに関する政府への期待

## 5. 政府・企業への要望

### 政府への期待は年齢が上の世代ほど大きい傾向

- 全体的に、年代が上の人ほど政府に対する期待が大きい傾向にある（図表5.2）。

生成AIに関する政府への期待（%）



n=847,878,1071,1218,986

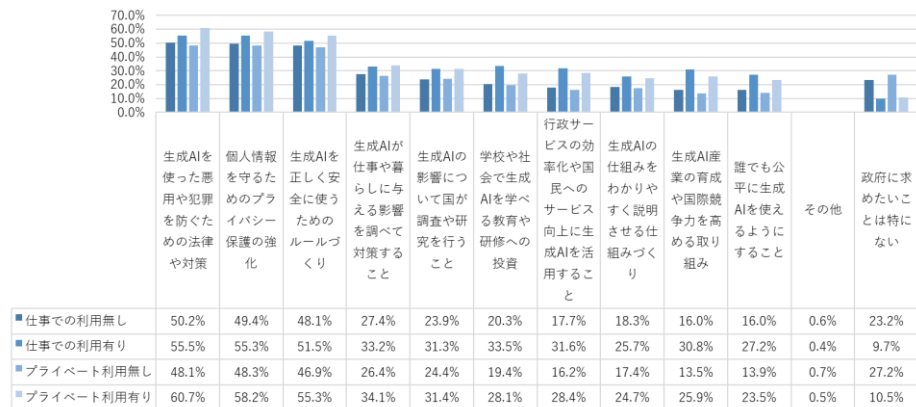
図表5.2 生成AIに関する政府への期待（年代別）

## 5. 政府・企業への要望

### 政府への期待は生成AI利用者、リテラシーの高い人の間で大きい傾向

- 生成AI利用者の方が政府に対する期待が大きく、特に教育や効率的な活用、公平性といった項目で、利用経験の有無による評価の乖離が大きい（図表5.3）。
- 生成AIリテラシーが高い人ほど政府に対する期待も大きい傾向にある（図表5.4）。

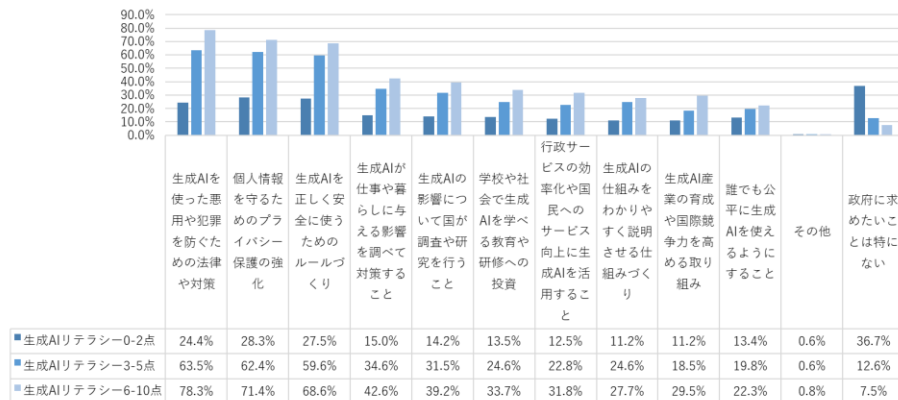
生成AIに関する政府への期待 (%)



n=2625,816,275,2225

図表5.3 生成AIに関する政府への期待（生成AI利用別）

生成AIに関する政府への期待 (%)



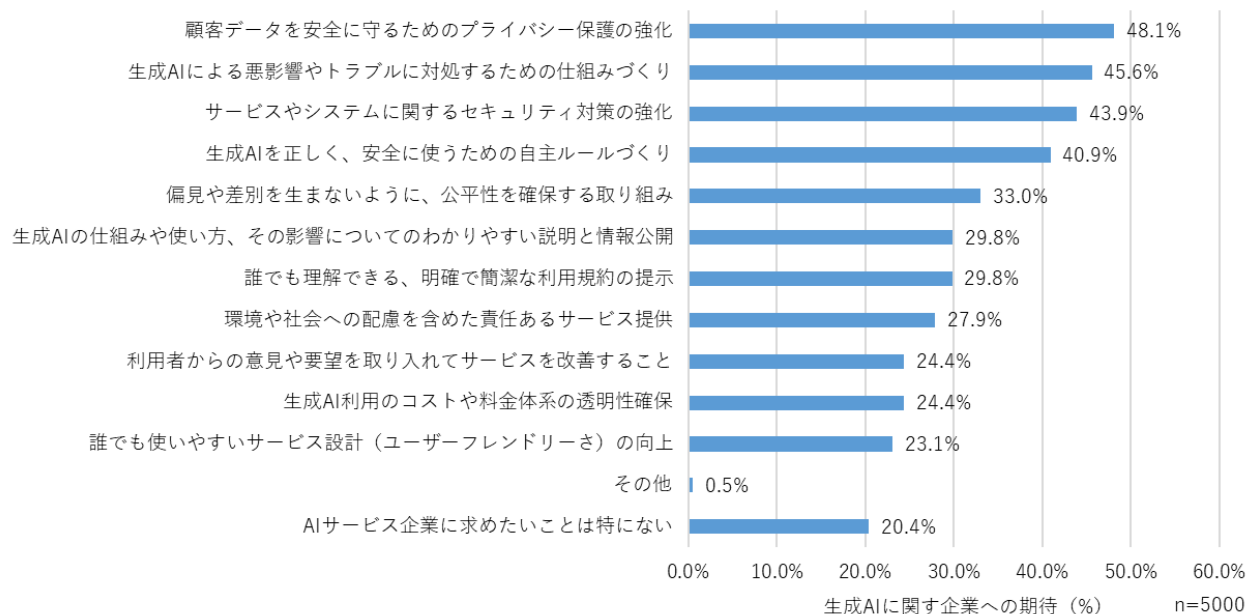
n=1766,1799,1435

図表5.4 生成AIに関する政府への期待（生成AIリテラシー別）

## 5. 政府・企業への要望

### 企業に対しても、生成AIによる潜在的なトラブルやリスクに対する対策が求められている

- 生成AIの関連企業に対しても、政府への期待と同様に、生成AIを利用することによって発生する可能性のある潜在的なトラブルやリスクに対する対策が強く求められている（図表5.5）。



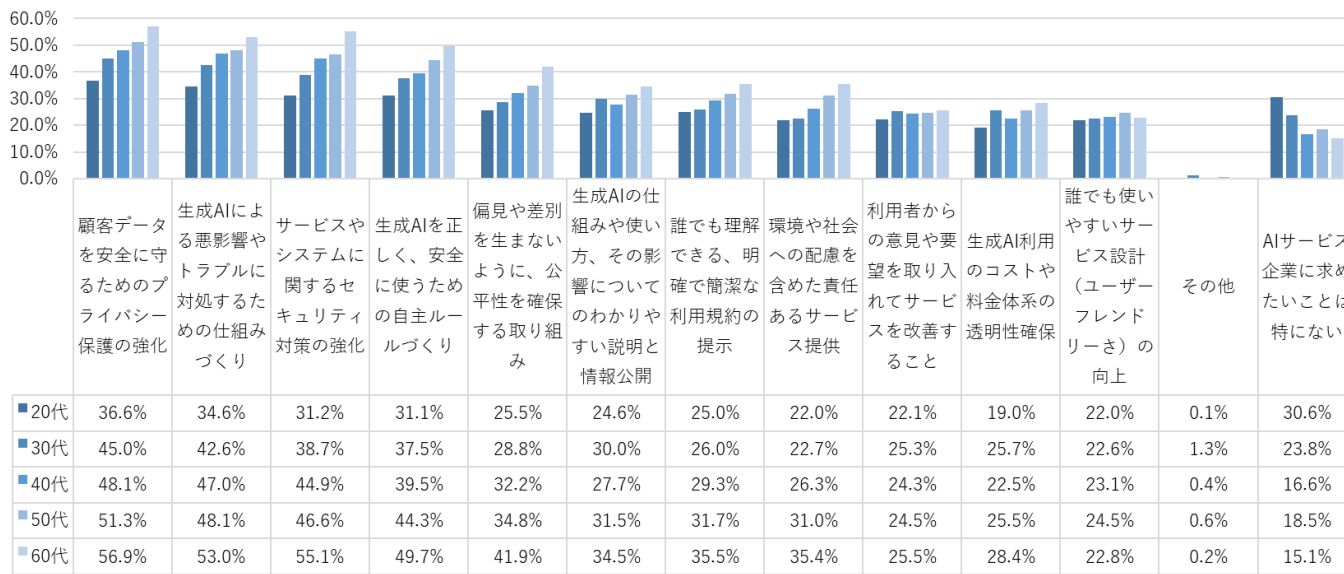
図表5.5 生成AIに関する企業への期待

## 5. 政府・企業への要望

### 企業への期待も年齢が上の世代ほど大きい傾向

- 政府への期待同様、全体的に、年代が上の人ほど企業に対する期待が大きい傾向にある（図表5.6）。

生成AIに関する企業への期待（%）



n=847,878,1071,1218,986

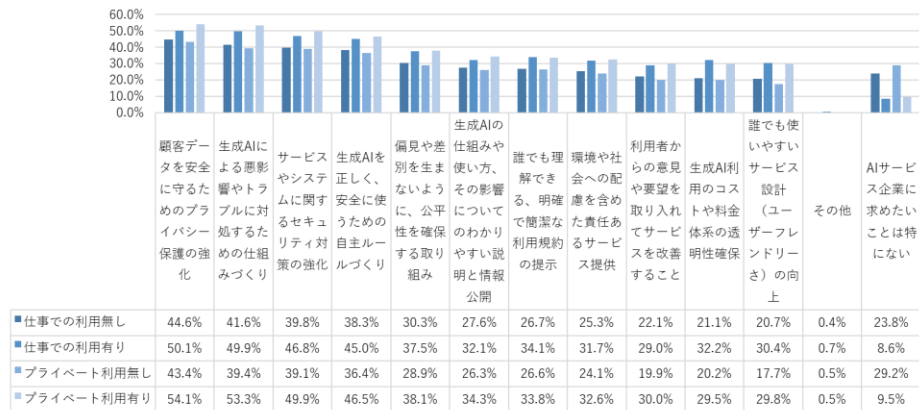
図表5.6 生成AIに関する企業への期待（年代別）

## 5. 政府・企業への要望

### 企業への期待も生成AI利用者、リテラシーの高い人の中で大きい傾向

- 政府への期待同様、利用者の方が企業に対する期待が大きい傾向にある（図表5.7）。
- 政府への期待同様、生成AIリテラシーが高い人ほど企業に対する期待も大きい傾向にある（図表5.8）。

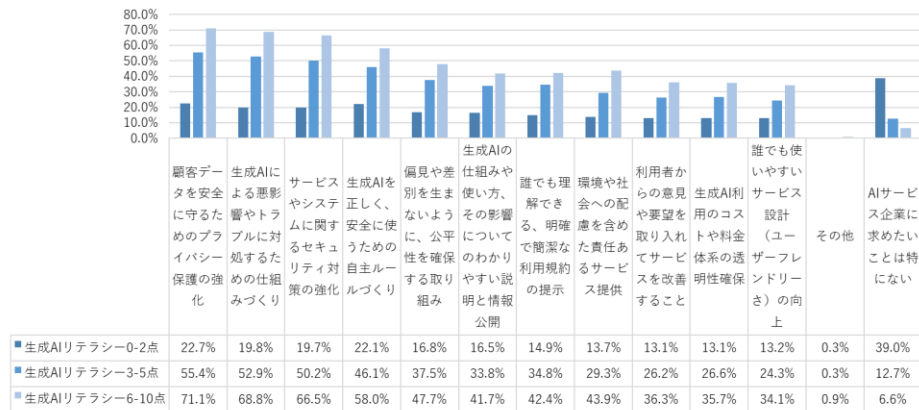
生成AIに関する企業への期待 (%)



n=2625,816,2775,2225

図表5.7 生成AIに関する企業への期待（生成AI利用別）

生成AIに関する企業への期待 (%)



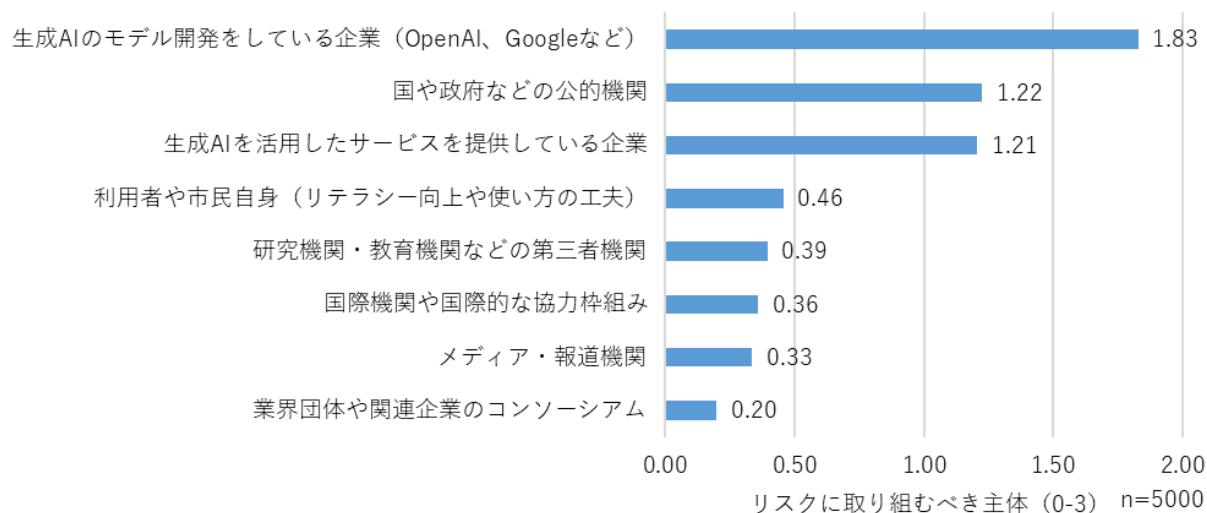
n=1766,1799,1435

図表5.8 生成AIに関する企業への期待（生成AIリテラシー別）

## 5. 政府・企業への要望

### 生成AIのモデル開発企業が、リスク低減に向けて取り組む主体として求められている

- 生成AIによるリスクの低減について取り組むべき主体について、1位から3位まで順位をつける形式で調査。
- リスク低減に向けて取り組むべき主体は、政府やサービスを提供する企業ではなく、まずは大本となるモデルを開発している企業が取り組むべきだと考えている人が多い（図表5.9）

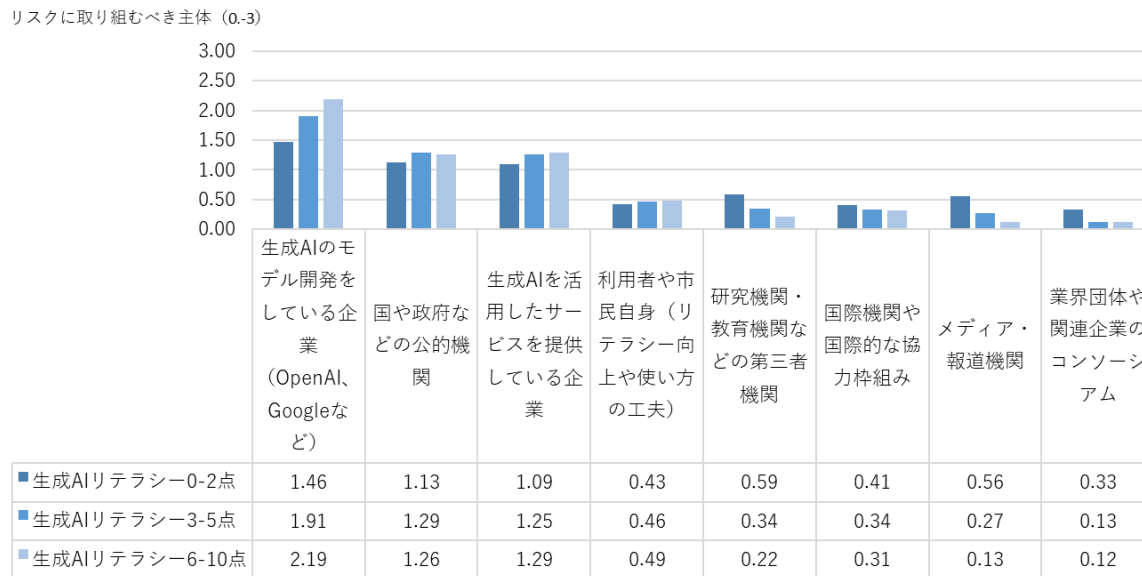


図表5.9 リスク低減に取り組むべき主体

## 5. 政府・企業への要望

### モデル開発企業の取り組みへ期待は、特にリテラシーが高い人の間で集まっている

- 生成AIのモデル開発をしている企業がリスクに取り組むべきと考えている人は、生成AIリテラシーが高い層で多い。一方で、外部の機関が取り組むべきだと考えている人は、リテラシーが低い層に多い傾向がある（図表5.12）



n=1766,1799,1435

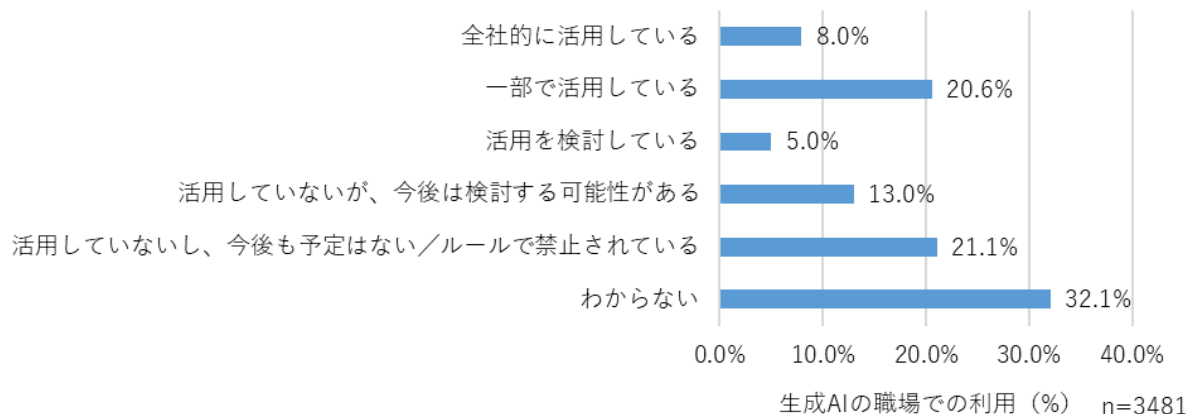
図表5.12 リスク低減に取り組むべき主体（生成AIリテラシー別）

# 6 企業での生成AI活用

## 6. 企業での生成AI活用

### 4分の1以上の企業が生成AIを活用、IN2024の調査と比較して+11.5%

- 企業での生成AI活用は、「全社的に活用している」は8.0%に留まるものの、「一部の部署で活用している」企業まで広がると28.6%となり、4分の1以上の企業が生成AIを活用している（図表6.1）。
- これをInnovation Nippon 2024当時と比較すると、+11.5%の企業が生成AIを活用している。
- 現在活用を検討していない企業は34.1%に上り、活用を具体化できている企業よりも多い企業が、まだ生成AIの活用について検討も行っていない。

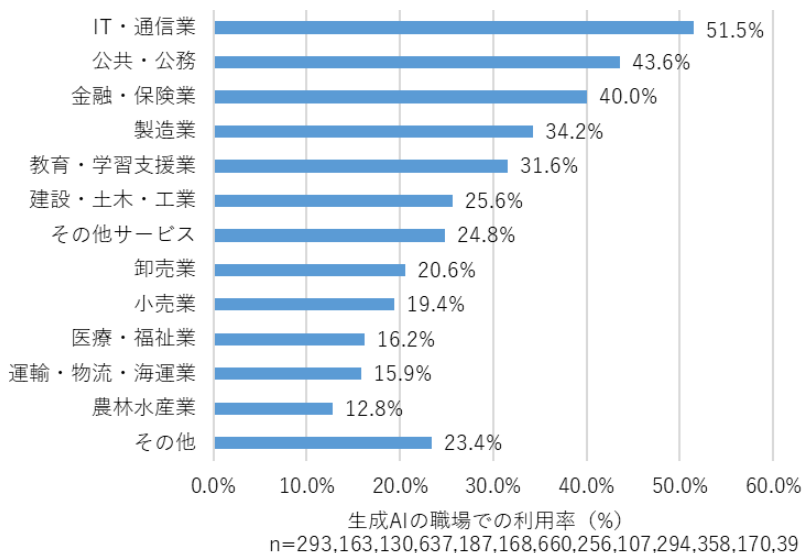


図表6.1 企業の生成AI活用状況

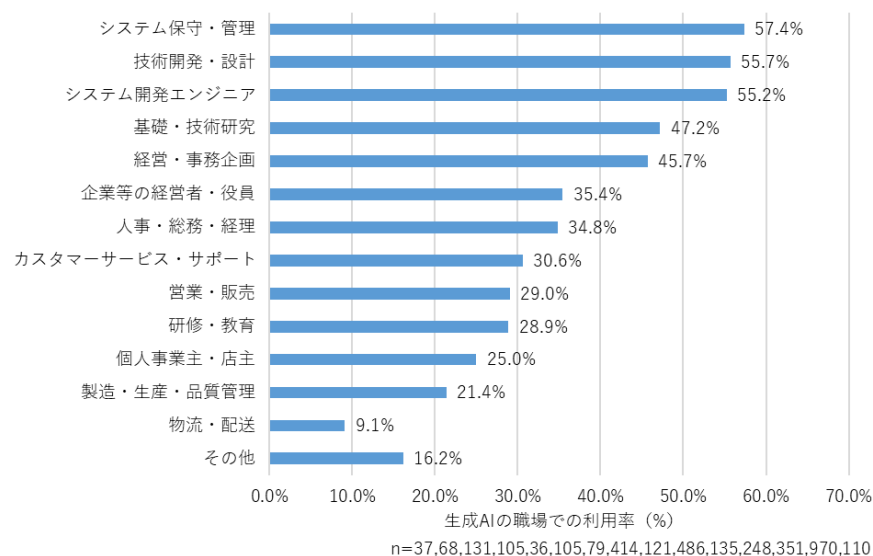
## 6. 企業での生成AI活用

### 生成AIの活用率は、業種では「IT・通信業」、部署ではシステム・技術系の部署で高い

- 生成AIの活用率が最も高い業種は「IT・通信業」、次いで「公共・公務」、「金融・保険業」と続く（図表6.2）。
- 部署別には、システム、技術系の部署では5割以上が生成AIを職場で活用しており、経営や企画系の部署も比較的利用率が高い（図表6.3）。



図表6.2 企業の生成AI活用状況（業種別）

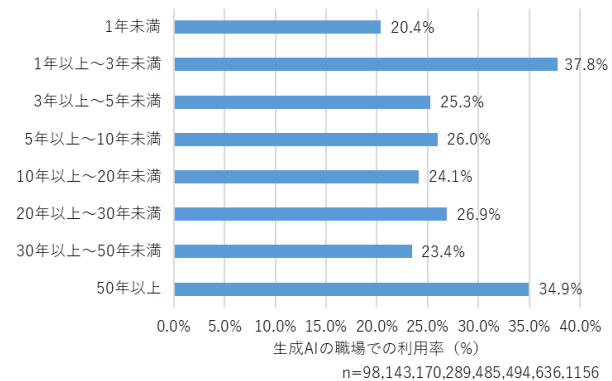
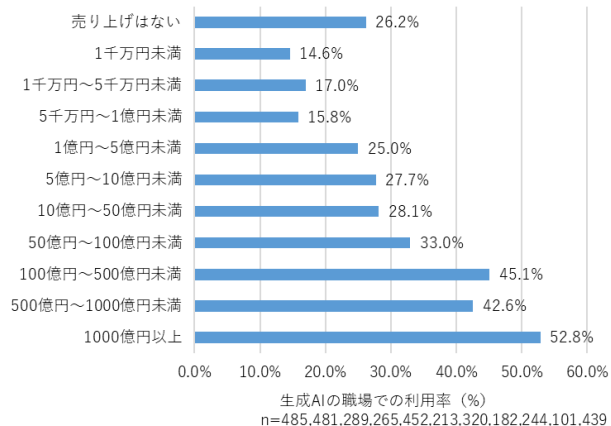
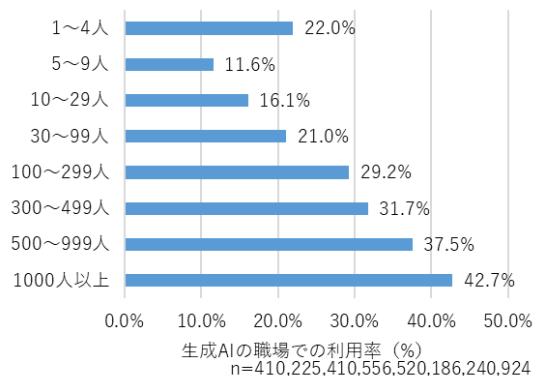


図表6.3 企業の生成AI活用状況（部署別）

## 6. 企業での生成AI活用

### 企業規模が大きいほど生成AIの活用傾向にあるも、一定以下の規模では逆転も

- 企業の人数が多いほど生成AIが活用されている傾向にあるが、個人事業主に近い業態や初期のスタートアップの場合も寧ろ積極的に活用している傾向にある（図表6.4）。
- 売上規模と生成AIの利用率には右肩上がりの関係性があり、売上1000億円以上の企業においては半数以上の企業が生成AIを活用している。但し、売上1億円未満の企業についてはほとんど差が見られない（図表6.5）。
- 設立年数別には、1年以上3年未満のスタートアップ企業の利用率が37.8%と最も高いが、次点は50年以上の老舗企業の利用率が34.9%と高くなっている（図表6.6）



図表6.4 企業の生成AI活用状況（企業規模別）

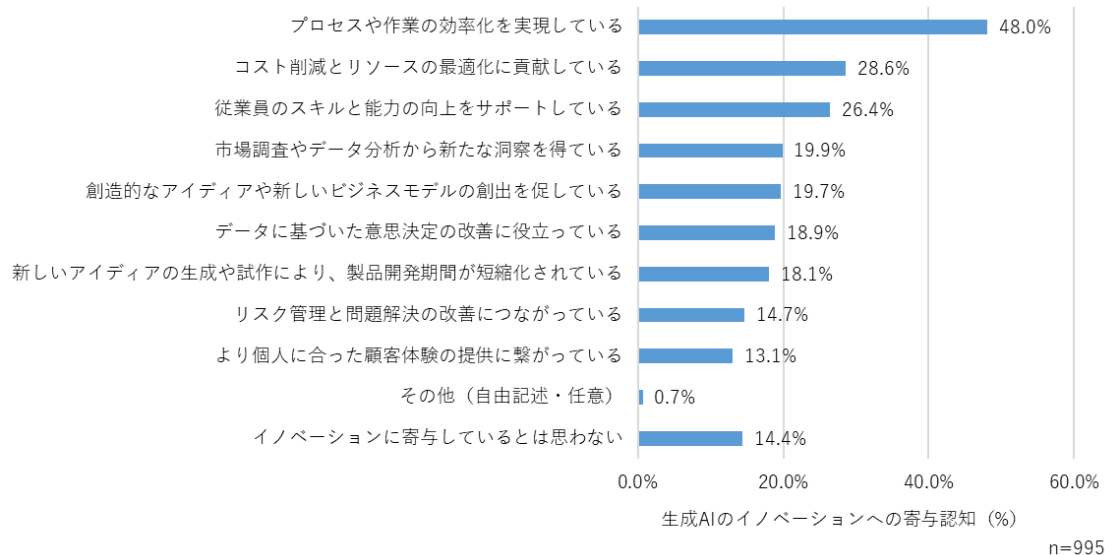
図表6.5 企業の生成AI活用状況（売上規模別）

図表6.6 企業の生成AI活用状況（設立からの年数別）

## 6. 企業での生成AI活用

### 85%以上の利用者が、生成AIがイノベーションへの寄与を実感

- 生成AIのイノベーションへの寄与の認知としては、「プロセスや作業の効率化を実現している」が圧倒的に多く、次いで「コスト削減とリソースの最適化に貢献している」、3番目に「従業員のスキルと能力の向上をサポートしている」が多い（図表6.7）。
- 85%以上の利用者が、生成AIが何らかのイノベーションに寄与していると回答している。

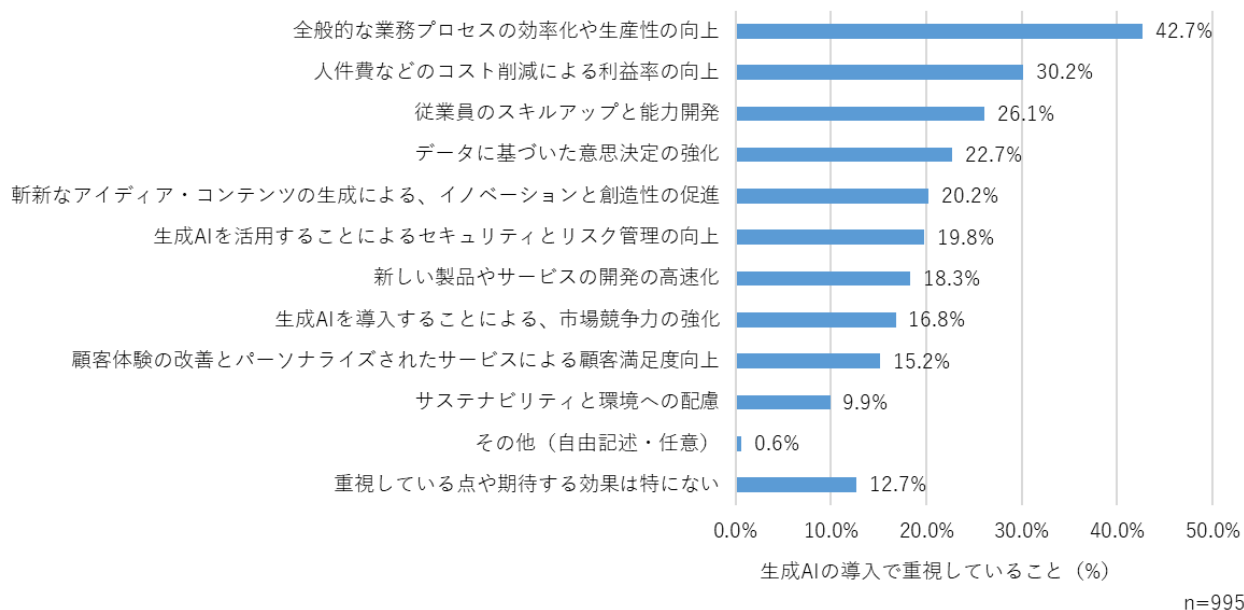


図表6.7 生成AIのイノベーションへの寄与

## 6. 企業での生成AI活用

### 生成AIは業務効率化やコスト削減目的での導入が主流

- 生成AIの導入目的においては、基本的には全般的な業務プロセスの効率化（42.7%）やコスト削減目的（30.2%）での導入が盛んに行われているが、従業員のスキルアップ目的（26.1%）にも生成AIが期待されている（図表6.8）。

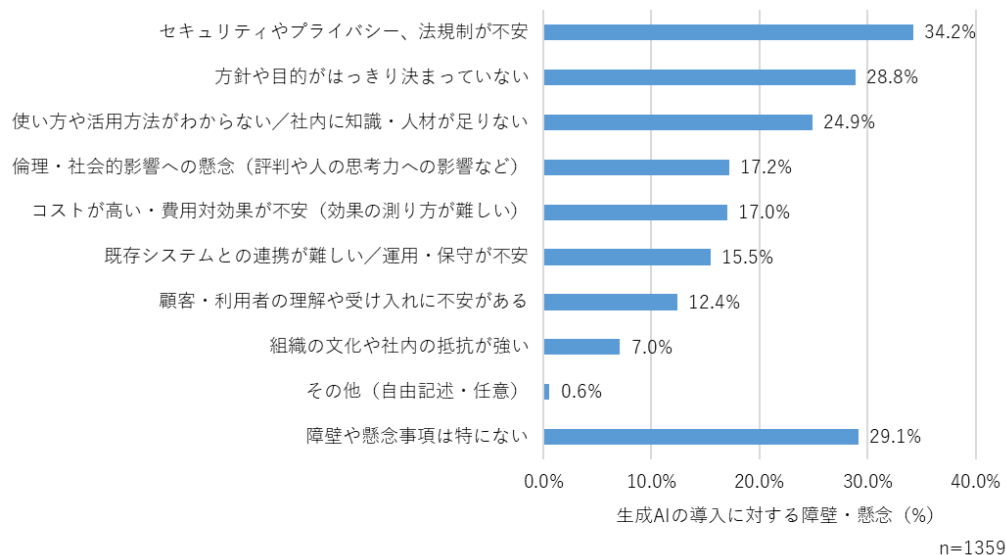


図表6.8 生成AIの導入で重視している項目

## 6. 企業での生成AI活用

### 生成AI導入における障壁は、方針や目的よりも、活用した際のリスクへ変化

- 生成AI導入の障壁は、方針や目的が決まらないことよりも、生成AIを利用することへのセキュリティリスクに対する懸念が大きい（図表6.9）
- IN2024当時と比較すると、適切な利用方法がわからないことや人員・技術的な課題から、生成AIを活用した際のリスクに関する課題へと障壁が変化している。



図表6.9 生成AIの導入に対する障壁・懸念

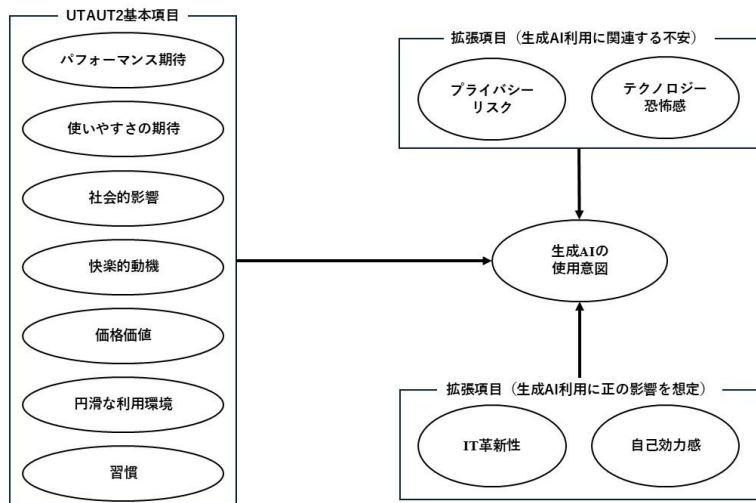
# 7

## 生成AIの受容決定要因

## 7. 生成AIの受容決定要因

### 生成AIの技術受容と心理的要因のモデル化（拡張UTAUT2モデル）

- テクノロジー受容モデルの理論的枠組みを消費者の視点に即して構成した、Unified Theory of Acceptance and Use of Technology 2 (UTAUT2) モデルを用いた分析を実施（図7.1）。
- 構造モデルの分析結果、生成AIの利用意図に対して正に有意の影響を与えていた構成要素は、快楽的動機、パフォーマンス期待、習慣、自己効力感、円滑な利用環境、使いやすさの期待、IT革新性、社会的影響の8要素（図表7.3）。
- 一方、テクノロジーに対する全般的な恐怖感は、生成AIの利用意図に対して負の影響を与えていた。



図表7.1 生成AIの利用意図に関するUTAUT2モデル概念図

図表7.3 生成AIの利用意図に関する構造分析の結果

変数	係数	p値
パフォーマンス期待 → 利用意図	0.214	0.000 **
使いやすさの期待 → 利用意図	0.069	0.000 **
社会的影響 → 利用意図	0.042	0.001 **
快楽的動機 → 利用意図	0.256	0.000 **
価格価値 → 利用意図	0.006	0.686
円滑な利用環境 → 利用意図	0.084	0.000 **
自己効力感 → 利用意図	0.146	0.000 **
習慣 → 利用意図	0.201	0.000 **
プライバシーリスク → 利用意図	-0.005	0.521
テクノロジー恐怖感 → 利用意図	-0.049	0.000 **
IT革新性 → 利用意図	0.056	0.000 **
R2	0.847	
n	5000	

注1: \*\*p<0.01, \*p<0.05

注2: ブートストラップ(5,000反復)により推定

## 7. 生成AIの受容決定要因

### 生成AIの利用意図には複数の心理的要因が影響し、テクノロジー恐怖感の利用意図を下げている

- パフォーマンスや使いやすさへの期待に加えて、生成AIを利用しやすい周囲の環境や他者からの影響、楽しいと感じる度合いが、生成AIの利用意図を押し上げている（図表7.4）。
- 価格価値は有意に行動意図に影響を与えておらず、生成AIには基本的には無料、あるいは低コストで利用できるサービスも多い現状が影響していると考えられる。
- 一方、生成AIの利用を妨げている要因として、テクノロジーの存在によって感じる漠然とした恐怖感や、それが現在の規範に対する脅威としての認識が負の影響を与えている。

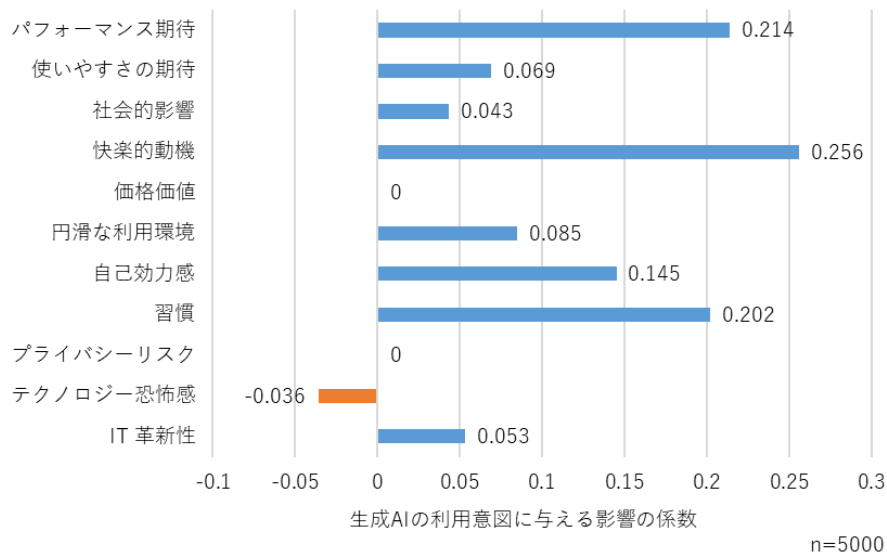
図表7.4 生成AIの利用意図に与える要素の整理

要素	要素の意味	利用意図への影響
パフォーマンス期待	生成AIの利用が日常生活における効率性や業務のパフォーマンスを高めると感じる度合い	生成AIへの利用意図を高める
使いやすさの期待	生成AIを利用したサービスの導入や利用に対する簡単さ・わかりやすさ	生成AIへの利用意図を高める
社会的影響	重要な他者が利用するべきだと考えている度合い	生成AIへの利用意図を高める
快楽的動機	生成AIを使うことを楽しいと感じる度合い	生成AIへの利用意図を高める
価格価値	個人が日常生活に生成AIを導入することによって得られる便益と費用の評価	影響していない
円滑な利用環境	生成AIを導入しやすくなるような、組織や周囲の技術的インフラ・環境の存在	生成AIへの利用意図を高める
自己効力感	自分は生成AIを使いこなせるという自己評価	生成AIへの利用意図を高める
習慣	利用者のルーティンとして生成AIの利用が含まれている度合い	生成AIへの利用意図を高める
プライバシーリスク	生成AIの利用を想定した際の、プライバシーに対する敏感さ	影響していない
テクノロジー恐怖感	現在の生活や規範に対する脅威としてのテクノロジーに対する恐怖感	生成AIへの利用意図を低下させる
IT革新性	新技術を試すことを好む一般的な傾向	生成AIへの利用意図を高める

## 7. 生成AIの受容決定要因

### 生成AIの利用意図には、機能や使いやすさへの期待よりも、「楽しさ」が最大の誘引

- 生成AI利用は機能よりも楽しさが最大の誘因となっており、ゲーム感覚・インタラクティブ性・親しみやすさを高める施策が、生成AIの利用意図を高めるためには有効（図表7.5）。
- 3番目には習慣の係数が大きくなっていることから、生成AIがユーザーのルーティンに組み込まれると利用が急速に定着する可能性がある。



図表7.5 生成AIの利用意図に影響を与える要素の大小関係

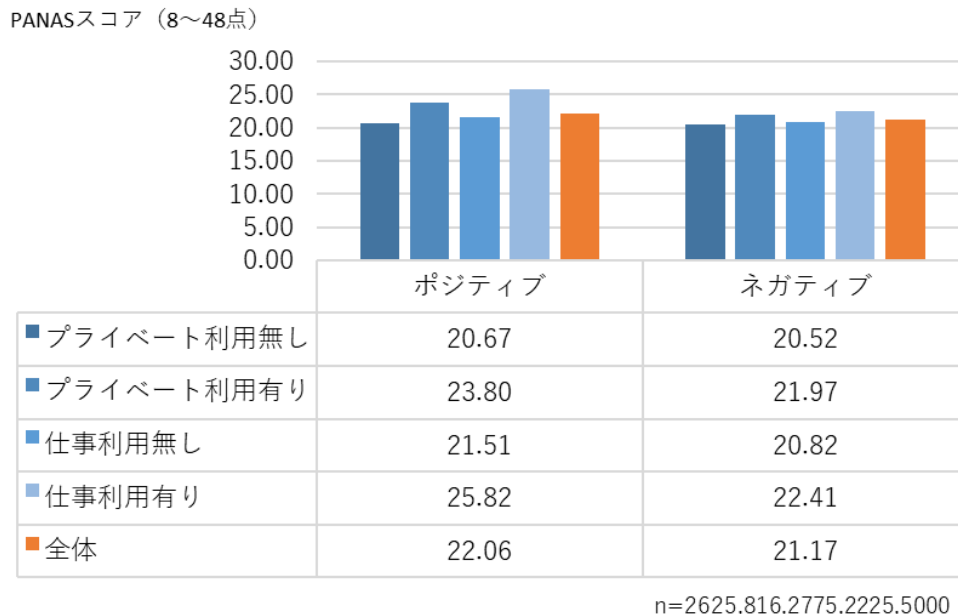
# 8

## 生成AI利用と幸福感の関係性

## 8. 生成AI利用と幸福感の関係性

### 生成AI利用者はポジティブとネガティブどちらの感情も想起されている傾向

- 生成AIの利用者は、非利用者と比較してポジティブとネガティブどちらの感情も想起されている傾向にある（図表8.1）。
- 利用有無での差分を見ると、仕事での利用者の方がプライベートでの利用者よりも、ポジティブな感情が想起される差分が大きい。一方、ネガティブな感情については大きな差は見られない。

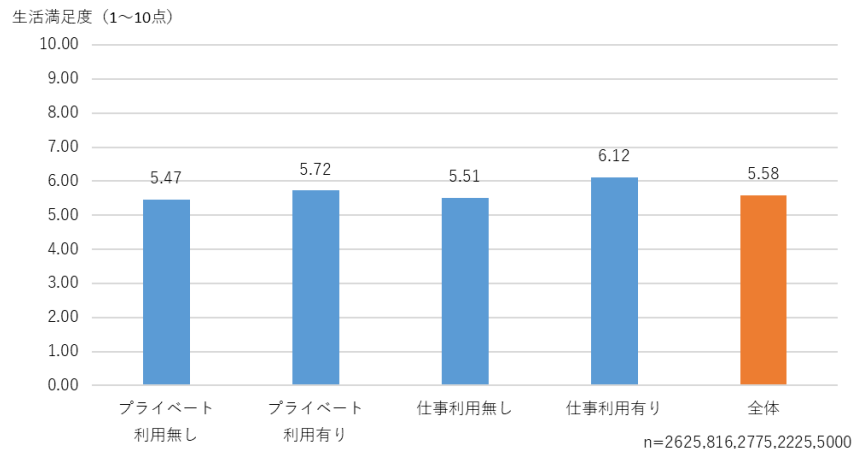


図表8.1 PANASスコア（全体+利用状況別）

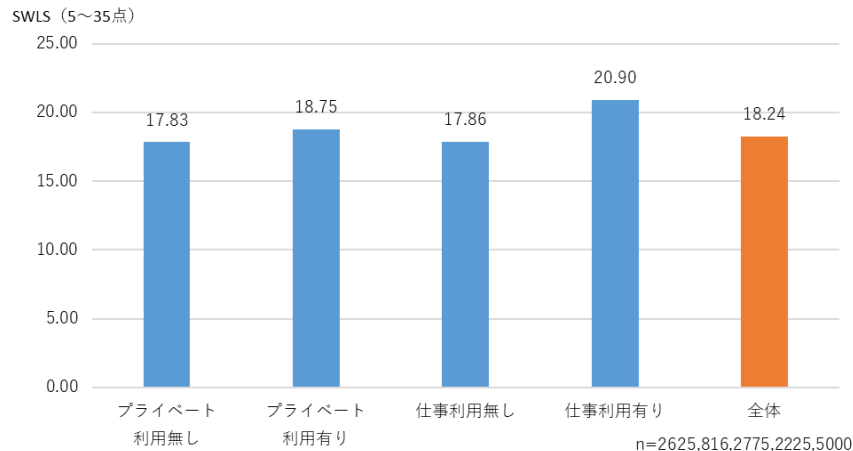
## 8. 生成AI利用と幸福感の関係性

### 生成AI利用者は人生満足度が高い傾向

- 仕事・プライベートともに、生成AIの利用者の方が生活満足度スコアが高い傾向（図表8.2）。
- 仕事・プライベートともに、生成AIの利用者の方が人生満足度スコア（SWLS）が高い傾向（図表8.3）
- 生成AIを利用している人の方が生活満足度・人生満足度がともに高い傾向にあり、特に仕事で生成AIを利用している人の方が両方の満足度が高い傾向にある（図表8.3）



図表8.2 生活満足度（全体+利用状況別）



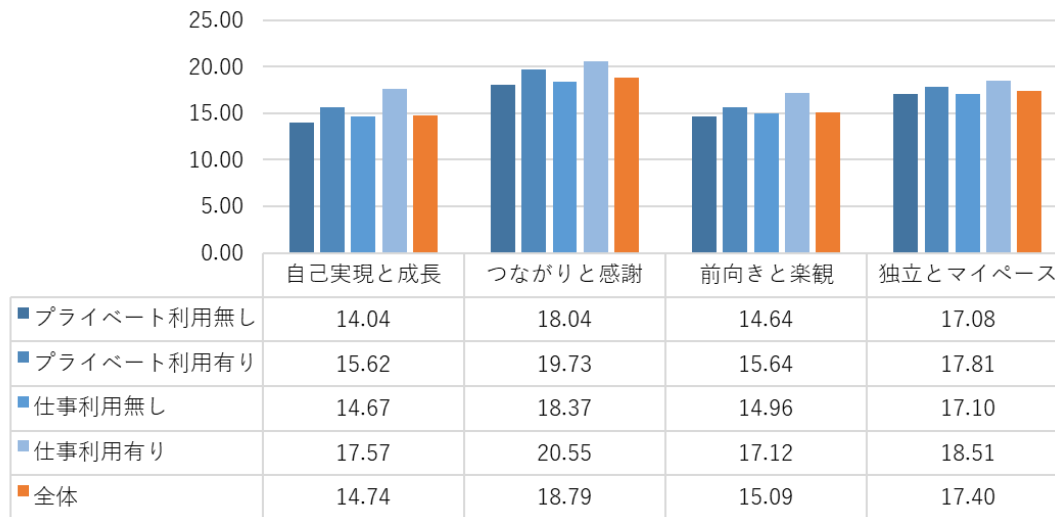
図表8.3 人生満足度（全体+利用状況別）

## 8. 生成AI利用と幸福感の関係性

### 生成AI利用者は複数の側面からの主観的幸福度が高い傾向

- 4つの因子すべてで生成AI利用者の方が非利用者よりもスコアが高い傾向にある（図表8.4）。
- 特に、プライベートで生成AIを利用をしている人は、周囲へのつながりや感謝の面での幸福感を得やすい傾向。一方、仕事で生成AIを利用している人は、自己実現や成長を実感することで幸福感を得やすい傾向にある。

主観的幸福度の四因子（4～28点）



n=2625,816,2775,2225,5000

図表8.4 主観的幸福の四因子（全体+利用状況別）

## 8. 生成AI利用と幸福感の関係性

### 仕事・プライベートを問わず、生成AI利用者は複数の側面から幸福度が高い傾向

- 個人の属性による影響を考慮した関係性を明らかにするために、回帰分析を実施（図表8.8）。
- 生成AIを利用している人は、非利用者と比較してポジティブとネガティブどちらの感情も想起されている傾向にあり、特にプライベートの利用をしている人の方がポジティブな感情を想起されている傾向にある。
- 生成AIの利用は仕事・プライベートを問わず、複数の因子から主観的幸福度の高さに関連しており、仕事での利用は自己実現や楽観、独立という観点、プライベートでの利用はつながりと感謝という観点での幸福度が高い傾向にある。
- 仕事での生成AI利用者は人生単位での満足度が高い傾向にある一方、プライベートでの利用は有意な傾向が見られない。
- 生活満足度については、仕事・プライベートともに生成AI利用との有意な傾向は見られなかった。

図表8.8 生成AIの利用と主観的幸福度の関係

		仕事での利用	標準化係数	プライベートでの利用
PANAS	ポジティブ	利用していると高い傾向	<	利用していると高い傾向
	ネガティブ	利用していると高い傾向	>	利用していると高い傾向
生活満足度 (LS)		-	-	-
人生満足度 (SWLS)		利用していると高い傾向	>	-
幸福の四因子	自己実現と成長	利用していると高い傾向	>	利用していると高い傾向
	つながりと感謝	利用していると高い傾向	<	利用していると高い傾向
	前向きと楽観	利用していると高い傾向	>	利用していると高い傾向
	独立とマイペース	利用していると高い傾向	>	利用していると高い傾向

注：赤色は望ましい傾向、青色は望ましくない傾向を示す

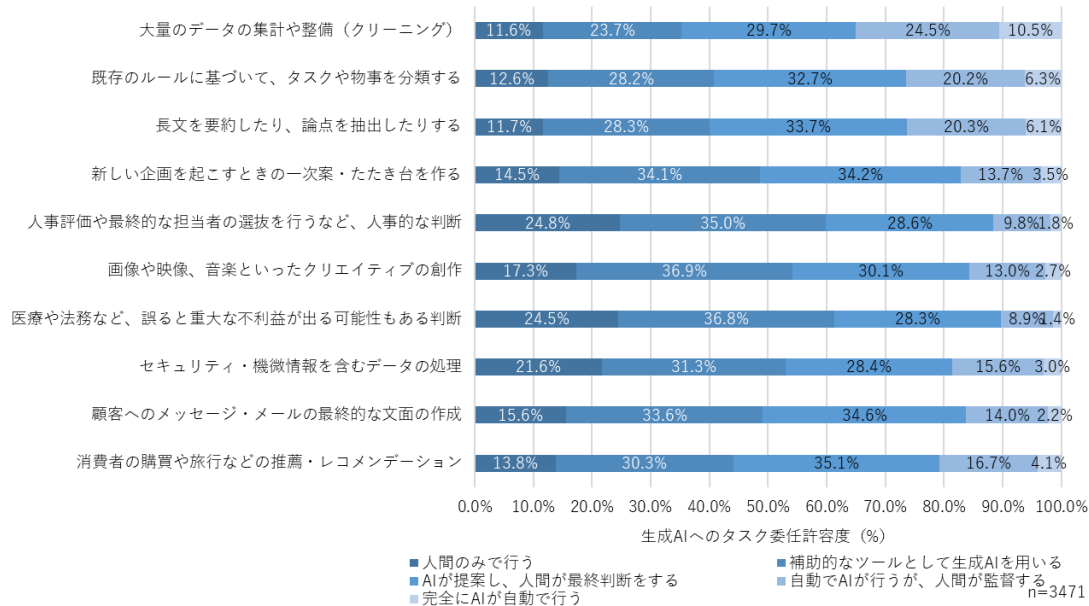
# 9

## 生成AIに対するタスク委任度と 信頼性の関係

## 9. 生成AIに対するタスク委任度と信頼性の関係

### 人間が最終判断を行えば、AIの提案を許容する人も多い

- 生成AIに対するタスク委任の許容度を、「人間のみで行う」～「完全にAIが自動で行う」の5段階でタスク別に調査。
- 人間が最終判断をする前提ではあるが、高リスク領域や人事、クリエイティブ領域を除くと、AIを補助的以上に活用し、提案を許容する人が多数派となっているタスクも多い（図表9.1）。



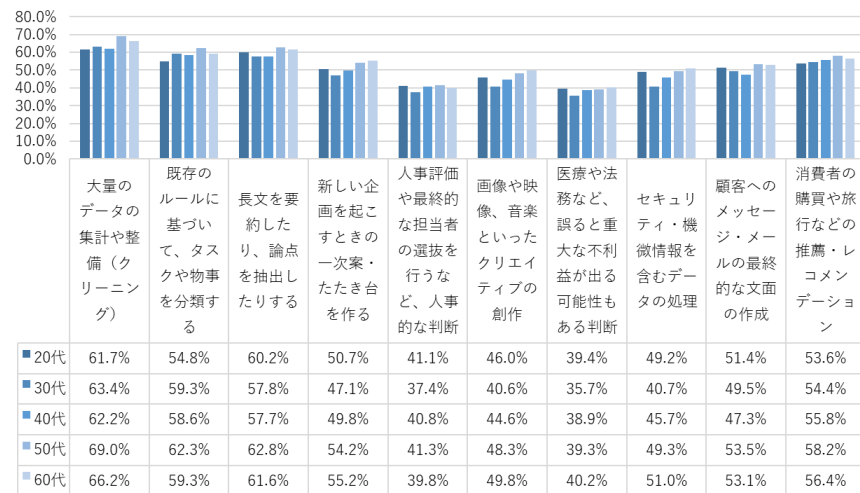
図表9.1 タスク委任許容度

## 9. 生成AIに対するタスク委任度と信頼性の関係

### 生成AIへのタスク委任許容度は、年代別にはU字型、女性の方が後ろ向き

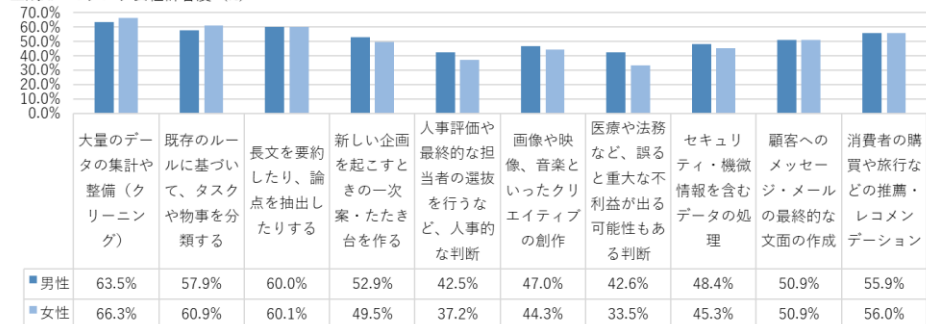
- 「AIが提案し、人間が最終判断をする」以上にAIへの委任を許容している人を「タスク委任を許容している」として集計。
- 年齢が高いほど新技術への委任を許容しないというわけではなく、寧ろ年代が高い人は前向きで、中堅の30代がタスク委任を許容していない、U字型を描く傾向にある（図表9.2）。
- 女性の方が、高リスク領域を中心に生成AIへのタスク委任について比較的後ろ向きな様子（図表9.3）。

生成AIへのタスク委任許容度 (%)



図表9.2 タスク委任を許容する人の割合 (年代別)

生成AIへのタスク委任許容度 (%)



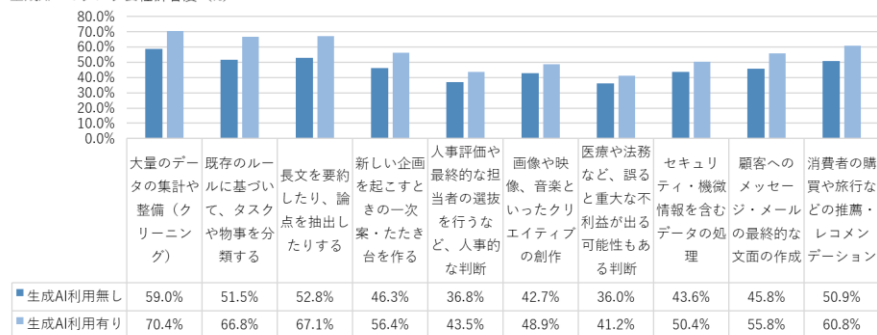
図表9.3 タスク委任を許容する人の割合 (男女別)

## 9. 生成AIに対するタスク委任度と信頼性の関係

### 生成AI利用者の方が委任許容度は高い、一方でリテラシーが高いと高リスク領域で逆転

- 生成AIを利用している人の方が、タスクを問わず一貫して委任許容度が高い（図表9.4）。
- 客観・定量的な業務やレコメンデーションのタスクについては、生成AIリテラシーが高い人ほど委任許容度が高い傾向（図表9.5）。
- 一方で、高リスク領域については真逆の傾向となっており、生成AIリテラシーが高い人ほど委任許容度が低い傾向にある。
- 生成AIへの知識を持っている人ほど、高リスク領域を委任することに対する警戒感を持っていることが示唆される。

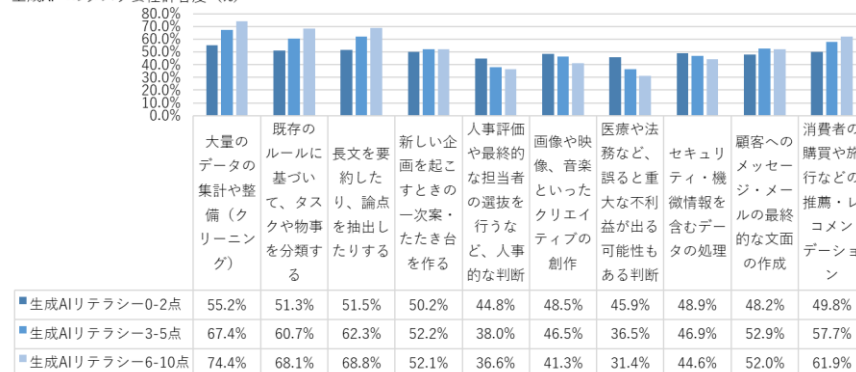
生成AIへのタスク委任許容度 (%)



n=1718,1753

図表9.4 タスク委任を許容する人の割合（生成AI利用有無別）

生成AIへのタスク委任許容度 (%)



n=1316,1188,967

図表9.5 タスク委任を許容する人の割合（生成AIリテラシー区分別）

## 9. 生成AIに対するタスク委任度と信頼性の関係

### 生成AIへのタスク委任度は能力に対する信頼性が主に関連も、リスク認知やリテラシーで逆転

- 回帰分析によって、生成AIへのタスク委任許容度と生成AIへの信頼度や利用傾向の関係性を分析（図表9.7）。
- 生成AIへのタスク委任度の高さは生成AIに対する能力を含む信頼度の高さに関連している。
- 生成AIを利用することによる個人情報の保護やデータセキュリティにリスクを感じている人は、人事や医療、セキュリティといった高リスク領域を生成AIの判断に委ねることはリスクが大きいと感じている。
- 生成AIに対するリテラシーが高い人は、クリエイティブの領域をAIによる自動化に委ねることにも後ろ向きであり、著作権や肖像権などの課題を認知できていることが関連している可能性がある。

図表9.7 タスク委任許容度と信頼度の関係性の概要

	整理	分類	要約	企画	人事	創作	医療	機微	顧客	推薦
能力への信頼性	+	+	+	+	+		+	+	+	+
理解・予測可能性				+	(+)	+	+	+	+	+
類似システムの認知・経験	-	-	-	-		-		-	-	-
開発者の意図		-	-		-		-			
システム全般への信頼		(+)			+		+			
生成AIへの信頼	+	+		+	+	+	+	+	+	+
プライバシーリスク認知	+	(+)			-		-	(-)		
利用頻度_仕事										
リテラシースコア	+	+	+			-	-			+

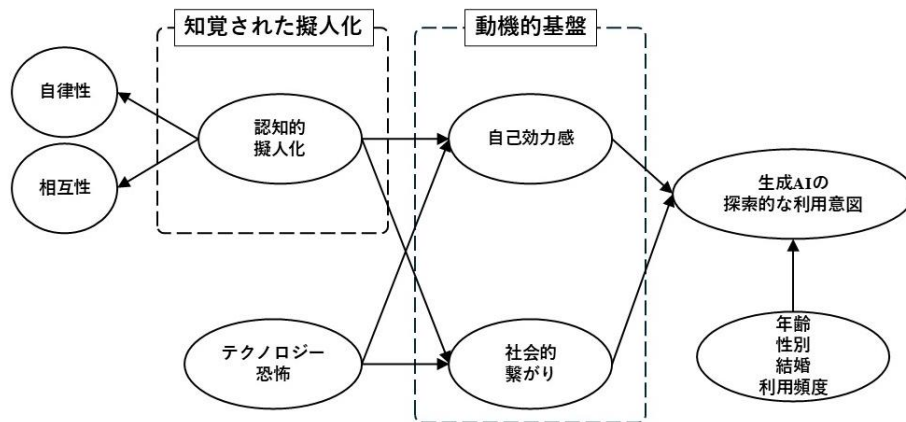
注：（）表記は $p < 0.1$ を示す

# 10 生成AIの擬人化的認知と 探索的利用意図

## 10. 生成AIの擬人化的認知と探索的利用意図

### 擬人化的認知と探索的な利用意図のモデル

- 生成AIを、賢く、社会的なつながりを得られる存在として擬人化して認知していることと、探索的に新しい利用手法を模索していることとの関係性を分析（図表10.3）。
- 探索的な利用意図を高める動機的基盤を「自己効力感（自分が効果的に生成AIを扱えるとする認知）」と「親密さ（生成AIとの社会的繋がりを感じ方）」の2点で定義。
- これら2つの要素に対して、生成AIに対する認知的擬人化が影響を与えることで、間接的に探索的な利用意図にも影響を与えるというのがモデルの基本的な考え方である。



図表10.3 生成AIの探索的利用意図に関するモデル概念図

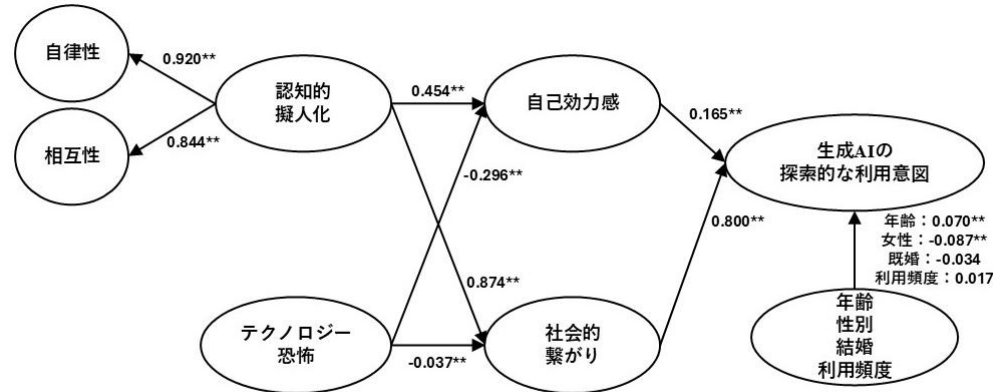
## 10. 生成AIの擬人化的認知と探索的利用意図

### 生成AIに対する擬人化的な認知が高い人は、間接的に生成AIの探索的利用意図も高まる

- 生成AIを擬人化して捉えている人は、生成AIが自律的に先回りしたり、過去のやり取りに則った応答をしたりしてくれているという認知傾向が高い（図表10.4）。
- 擬人化的な認知度が高い人は、生成AIを心地よい話し相手であると捉える傾向が高く、使いこなせると考えている自信も高い。
- 探索的な利用については、生成AIを使いこなせる自信があることも正に影響しているが、生成AIに対して親近感や社会的なつながりを感じていることの方が重要である。

図表10.4 生成AIの擬人化に関する構造モデルの分析結果

パス	標準化係数	p値
擬人化変数		
認知的擬人化 -> 自律性	0.920	0.000 **
認知的擬人化 -> 相互性	0.844	0.000 **
認知的擬人化 -> 社会的繋がり	0.874	0.000 **
テクノロジー恐怖 -> 社会的繋がり	-0.087	0.000 **
認知的擬人化 -> 自己効力感	0.454	0.000 **
テクノロジー恐怖 -> 自己効力感	-0.296	0.000 **
社会的繋がり -> 探索的利用意図	0.800	0.000 **
自己効力感 -> 探索的利用意図	0.165	0.000 **
属性		
年齢 -> 探索的利用意図	0.070	0.000 **
性別女性 -> 探索的利用意図	-0.087	0.000 **
既婚 -> 探索的利用意図	-0.034	0.077
利用頻度(日/月) -> 探索的利用意図	0.017	0.351



注1: \*\*p<0.01, \*p<0.05

図表10.5 生成AIの擬人化に関する構造モデルの分析結果（パス図）

1 1

# 生成AIの導入と定着に関する インタビュー調査

# 11. 生成AIの導入と定着に関するインタビュー調査

## 調査方法およびインフォーマントのプロフィール

- 対象：生成AIの積極活用層（生活者、企業関係者、教育関係者、個人事業主、自治体担当者等）（10名）
- 実施方法：オンライン半構造化インタビュー
- 所要時間：各60分
- 設問構成：①導入から定着までのプロセス、②活用がもたらす主観的な変化、③格差をめぐる認識と見立て、④リテラシーとリスクへの向き合い方、⑤制度的整備と教育・行政への期待

図表11.1 インフォーマントのプロフィール（「-」は該当なし）

ID	性別	年齢	居住地	職業	主な使用状況	主な使用ツール（仕事・学業）	主な使用ツール（私生活）
A	男性	30歳	秋田県	公務員	私生活	-	Gemini、ChatGPT
B	女性	46歳	福岡県	自営業	私生活	ChatGPT、Microsoft Copilot、Gemini、Grok	Microsoft Copilot
C	女性	37歳	東京都	専業主婦	私生活	-	ChatGPT、Gemini
D	男性	28歳	神奈川県	会社員	私生活	ChatGPT	Gemini、Microsoft Copilot、ChatGPT
E	男性	46歳	神奈川県	会社員	私生活	ChatGPT、Gemini、Canva、Claude、Perplexity、Notion AI	ChatGPT、Gemini
F	男性	52歳	神奈川県	会社員	仕事・学業	Microsoft Copilot、ChatGPT	Gemini
G	男性	26歳	熊本県	無職	仕事・学業	ChatGPT、Gemini、Claude	その他の生成AIサービス
H	女性	48歳	東京都	会社員	私生活	Microsoft Copilot、ChatGPT	ChatGPT、Gemini、Grok、Canva
I	女性	32歳	東京都	会社員	仕事・学業	Microsoft Copilot、ChatGPT	Canva
J	女性	51歳	東京都	教員	仕事・学業	ChatGPT、Gemini、Perplexity	ChatGPT

## 11. 生成AIの導入と定着に関するインタビュー調査

### 導入から定着までのプロセス

- 生成AIの導入の契機は、職域の要請、周囲からの推奨、SNS等での話題化、既存サービスへの組み込みといった要因が重なって形成されていた。
- 生成AIの利用は検索代替にとどまらず、要約、比較整理、構成案作成、論点整理といった思考工程の補助へ広がっている。
- 特に、複数の生成AIを併用し、目的に応じて使い分ける「マルチツール利用」が一般化している。
- 便利さを実感しつつも、すべて任せることへの忌避感が語られる場面があり、とりわけ高リスク領域では「参考にはするが、最終判断は人が担う」という姿勢が共有された。

### 活用がもたらす主観的な変化

- 定型度の高い作業で時間短縮が語られる一方、その効果が必ずしも負担軽減に直結するとは限らず、期待水準の上昇による負担増や、点検・検証といった新たな作業が増える可能性も示された。
- 効率化の語りには、心理的な障壁の軽減も含まれていた。文章作成や対外的なコミュニケーションにおける不安の軽減や、状況や感情をいったん言語化して落ち着かせるという使い方が語られている。
- 効率化が「余白」を生む一方で、同じ時間内での要求量が増えるというパラドックスは、主観的な負担として捉えられる可能性がある。
- 生成AIの出力はそのまま使えるとは限らず、誤りやズレを前提に点検や検証を行う必要があるなど、効率化の裏側で、確認や調整の手間が増える可能性も示唆された。
- こうした新たな負担は、利便性の実感と並走しながら、利用の境界設定や運用ルールへの関心を高める要因になっている。

## 11. 生成AIの導入と定着に関するインタビュー調査

### 格差をめぐる認識と見立て

- 高齢層については、スマートフォン等のデバイスやサービス環境へのアクセスの差、日常的に使い慣れているかどうかの影響し得る。
- 職場や身近なコミュニティで生成AIの利用が広がっているかどうか、使い始めるきっかけや学習機会を左右する。
- 若年層の教育現場において、生成AIの利用が前提化すると、自分で考えたり調べたりして答えを探す経験が減り、学習の基礎となる力が育ちにくくなるのではないかという不安が語られた。
- 生成AIが特定の困難を抱える人にとって、支援的に機能し得るという語りもみられた。

### リテラシーとリスクへの向き合い方

- 生成AIが出力する情報の真偽については、誤りを前提とした検証行動などの実務的な工夫が語られた一方、利用者側の努力だけでは解決しにくい領域があるという認識も示され、最低限の制度的対応が必要だという認識がみられた。
- セキュリティとプライバシーの論点では、個人名や機密情報をそのまま入力しない、記号化する、固有名詞を抽象化して相談するなど、自己防衛的な工夫が語られた。

## 11. 生成AIの導入と定着に関するインタビュー調査

### 制度的整備と教育・行政への期待

- 生成AIをめぐる制度への期待は強くはなく、倫理的懸念を抱えつつも現実的には運用とリテラシーで折り合いをつける姿勢が相対的に強い。
- 一方で、フェイク動画や著作権など一部の領域では、罰則を含む法的対応が必要だという意見もみられ、制度への評価は論点によって揺れている。また、国の制度よりも、提供企業側の対応や運用設計を求める語りもあった。
- 教育や人材育成の領域では、運用ルールや環境づくりの必要性が比較的実感を伴って語られた。
- さらに、人口減少や人手不足を見据えて、公共領域でAIを活用せざるを得ないという見方も示されている。

### 小結：本調査から得られる示唆と2024年調査結果との比較

- IN2024の調査と共通して、利用開始は完全に自発的というより、業務上の必要や周囲の利用拡大など外的要因が背中を押す形で生じやすい。また、生成AIを万能視しているわけではなく、効率化や負担軽減などをもたらす実利的ツールとしての期待が語られやすい。
- 一方、本調査では、複数ツールの使い分け、検証行動の具体、入力回避や運用ルールの工夫などが行動レベルで語られ、啓発ニーズもチェックリストや領域別運用例など実務的な形で明確化されていた。
- また、2024年調査と比べて、生成AIの活用がもたらす効果やリスクが「具体的な実践」だけでなく、それを支える認識や感覚のレベルまで踏み込んで語られた点が特徴的である。
- 格差の捉え方も整理が進んでおり、個人の能力差というよりも「生成AIを利用できる条件の差」が格差を生み得るという見方が前景化している。

# 12

## 生成AIに関する文献調査

## 12. 生成AIに関する文献調査

### 生成AIの利用と効果の研究

- 日本は生成AIの利用率は他国の半分未満と低い。しかし、Ipsosの調査からは、日本はAIに対する抵抗感や懸念が他国より圧倒的に弱く、AI普及が進みやすい国なのではないか、とも考えられる。
- AI利用の効果について、時間節約効果に関する研究では、週に5～7時間程度、つまり大きい場合にはほぼ一日分の労働時間を節約できるケースがあることが確認できる。
- ただし、利用者の業務・業績・労働時間などをどう変えるのか、企業組織レベルで業績が変わるのか、など視野を時間的・対象範囲的に広げていくほど不明瞭な部分が多く、より多くの実証研究がなされることが望ましい。
- AI利用がどの程度経済を大きく変動させることになるかについては、様々な研究がなされているが、ミクロレベルでの研究と違い、比較的効果が確認しづらい。
- ミクロレベルでは利用者が個別の業務・作業をする際には時間が節約でき、品質が向上したり、クリエイティビティが向上したりといった効果が見られる。
- 対照的に、経済全体の効果として例えば失業や賃金の大きな変動などは見られないとする研究も多い。また、AI導入が企業レベルでも成長や生産性向上などにつながっていないとする研究も存在している。
- 利用の格差の文脈では、男性、若年層、大卒者、都市部住民、高収入国、などにAI利用率が高いことが伺われる。

## 12. 生成AIに関する文献調査

### 分野別の利用

- 認知能力については比較的研究の蓄積があり、AI利用は批判的思考やクリエイティビティを含め様々なポジティブな効果をもたらす傾向が認められた。
- 政策決定の上ではAIの認知能力への効果については短絡的な悲観を正当化する理由は乏しいように思われる。
- ただしどのような条件下でより効果が強く・弱くなるか、など詳細な検討は課題として残されている部分も大きい。
- メンタルヘルス分野においては、相談相手として生成AIを利用する若年層は少なくない。また、正の効果があると期待できることが研究からも伺えるが、限界も多く統合的な結論には至っていない。
- 教育分野では、生成AIを使うことで思考力や学力が落ちるのではないか、という懸念は報道などでもとりあげられる反面、AIの効果的な利用を報告する研究も珍しくない（問題解決、批判的思考、計算的思考、論理的思考などは有意に向上した等）。
- 米国で学校向けのAIについてのガイダンスを公表している州は既に34州にのぼっている。

## 12. 生成AIに関する文献調査

### 政策・ガバナンスの動向

- 米国は党派対立が深刻化していることなどにより議会の立法機能が低調であり、大統領令と州法が制度形成を担っている度合いが高いが、州法には積極的な規制を進めようとするものもあり、大統領府との協調はとれていない。
- 州ごとに様々な法規制ができるという分散型の統治構造は、多様な試行錯誤の中から優れた制度やそれを支える考え方、概念などが台頭して来るメリットもあるが、それには時間がかかると思われる。
- EUはAI法を制定し禁止、罰則付きの義務なども含めた制度を形成している点が注目されることが多いが、それを実効性のあるものにするための重要な細部は標準化などマルチステークホルダーの合意形成プロセスを経て定めるものもある。
- 日本のガバナンスは、既存法を除くと法的拘束力を持たせないガイドライン類を中心にしている。
- EUや米国に比べて優れたアプローチになるかどうかは自明ではないが、変化の激しさへの対応がしやすいこと、多様な利害関係者の持つ意向や情報を取り入れた制度形成がしやすいことなどがメリットになる可能性はあるだろう。
- 国際的な面に注目すると、日本は2023年G7広島会合をきっかけに国際的なプレゼンスを高めることになったように思われる。この取り組みにG7の構成国を超えた広がりが見られる点に注目している。

# 13

提言：

生成AI時代における社会実装の方向性

## 13. 提言：生成AI時代における社会実装の方向性

### 第一の方向性：生成AIの利用機会を社会全体に広げる

#### 1. 生成AI政策の重点を「普及率中心」から「利用機会の格差是正」へ広げる

- 生成AIの利用状況において、学歴、居住地域、企業規模などによる差が確認された（図表2.10、図表2.11、図表6.4）。
  - 特に業務利用については、大卒以上の層や大都市圏の居住者、大企業の従業員で利用率が高い傾向が見られた。この結果は、生成AIの恩恵が社会の一部に偏る可能性を示唆している（図表2.10、図表2.11、図表6.4）。
  - 一方で、生成AIは比較的低コストで利用できるサービスも多く、利用環境次第では格差を縮める可能性もある（第11章）。
- ⇒ そのため、今後の政策では、単に利用率の上昇を目標とするのではなく、地方、中小企業、非大卒層など、これまでデジタル技術の活用機会が限られてきた層に対して、どの程度利用機会を提供できているかを重要な指標として評価すべきである。

#### 2. 社会全体に向けた基礎的AIリテラシー教育を強化する

- 生成AIに関する基本的な知識の理解度は、利用者においても高くないことが確認された（図表3.5）。
  - 特に、画像生成AIを利用した際のバイアスや著作権に対する知識の低さが浮き彫りとなっているほか、生成AIというシステムや使われている技術に対する理解度の低さも見えた（図表3.3）。
- ⇒ 生成AIの社会的利用が拡大する中で、最低限の理解を社会全体で共有することは不可欠である。具体的には、生成AIの出力が常に正確とは限らないこと、個人情報や機密情報の入力には注意が必要であること、出力バイアスや著作権に関する知識など、日常生活や業務に関係する基本的な知識の普及が求められる。

## 13. 提言：生成AI時代における社会実装の方向性

### 第一の方向性：生成AIの利用機会を社会全体に広げる

#### 3. AIリテラシー教育を講座中心から日常利用の中で学べる仕組みへ転換する

- 生成AIについて特に学びたいと考えていない人も3人に1人程度存在していることが本調査から明らかになった（図表3.12）。
  - 知識を身に着ける手段としては、ウェブ記事・SNS・動画配信などのインターネットやアプリ、テレビ・新聞などのメディアなどが期待されていた（図表3.12）。
  - したがって、従来の講座や研修だけでは十分な効果が得られない可能性がある。
- ⇒ 今後は、コミュニケーションツール、動画共有サービス、検索サービス、教育ツール、業務支援ツールなど、日常的に利用されるデジタルサービスの中に、AI利用に関する注意喚起や確認プロセスを組み込み、利用の過程で自然に理解が深まる仕組みを整備することが求められる。

## 13. 提言：生成AI時代における社会実装の方向性

### 第二の方向性：安全で信頼できるAI利用環境を整備する

#### 4. AIの利用領域と人間の判断の役割を整理する

- 行政窓口対応などの事務的な業務に対してはAI活用への受容度が比較的高い（図表4.5、第9章）。
  - 一方で、司法判断、教育評価、人事判断などの専門性が高く、かつ人々の人生に大きな影響を与える分野では慎重な意見が多く見られた（図表4.5、第9章）。
- ⇒ これは、AI活用に対する社会的受容が業務の種類によって異なる可能性を示している。したがって、AIの利用を推奨する領域と、人間による最終判断を必要とする領域について整理していくことが重要である。

#### 5. 企業のAI導入支援を操作教育から運用ガバナンス整備へ重点転換する

- 企業が生成AIを導入していない理由としては、セキュリティやプライバシー、法的リスクへの懸念が多く挙げられた（図表6.9）。
  - 2年前の調査では利用方法が分からないことや人材不足が大きな理由として挙げられていたことを踏まえると、生成AI導入の課題が単なる技術習得の問題から、運用管理の問題へと移行しているといえる。
  - 企業に対してAIの適切な利用ルールの整備や責任ある運用を求める意見も一定程度確認された（図表5.5、図表5.9）。
- ⇒ 今後は、入力情報の管理、ログ管理、利用範囲の明確化、著作権や個人情報への配慮などを含む実務的な運用ルールの整備が重要となる。

## 13. 提言：生成AI時代における社会実装の方向性

### 第二の方向性：安全で信頼できるAI利用環境を整備する

#### 6. AI利用において検証と批判的思考を重視する教育を推進する

- 生成AIの出力に対する信頼度は必ずしも高くない一方で、利用経験のある人ほど信頼する傾向が確認された（図表4.9、図表4.11）。
  - 若年層は生成AIの利用率が高い一方で、必ずしもAIに関する知識が十分とは言えない可能性も示唆された（図表2.14、図表2.18、図表3.5）。
- ⇒ AIの出力には誤りが含まれる可能性もあることから、利用が広がる中では、出力内容をそのまま受け入れるのではなく、確認や検証を行う行動が重要になると考えられる。学校教育などにおいては、AIの利用能力だけでなく、情報を批判的に検討し判断する能力をあわせて育成していくことが重要である。

## 13. 提言：生成AI時代における社会実装の方向性

### 第三の方向性：AI活用による社会的価値の拡張

#### 7. 企業はAI導入の効果を測定する仕組みを整備する

- 生成AIを導入している企業の多くは業務効率化などの効果を実感していると回答している（図表6.7）。
  - 一方で、国内外の調査では、生成AI導入の効果を定量的に評価している企業は必ずしも多くないことが指摘されている（第12章）。
- ⇒ こうした状況を踏まえると、AI導入を持続的な競争力につなげるためには、業務時間の短縮や業務品質の変化などを客観的に測定し、その結果を踏まえて継続的に改善していく仕組みを整備することが重要である。

#### 8. 行政AIは人の代替ではなく行政サービスへのアクセス改善に活用する

- 行政窓口の案内や手続き説明などにAI活用を期待する人の割合は約半分と、高い傾向が見られた（図表4.5）。
  - 政策立案や行政判断に関する助言など、意思決定を支援する用途についても一定の期待が確認された（図表4.5）。
  - 政府に対して生成AIの安全な利用環境の整備や適切なルールづくりを求める意見も一定程度確認された（図表5.1）。
  - これらの結果は、行政AIに対して必ずしも人間の判断を代替する役割だけが求められているわけではなく、行政サービスへのアクセスを改善する支援ツールとしての役割にも期待が寄せられていることを示している。
- ⇒ 行政におけるAI活用は、住民が必要な情報に迅速にアクセスできる環境を整備するための支援ツールとして活用するとともに、行政判断を補助する形での利用についても検討していくことが望ましい。

## 13. 提言：生成AI時代における社会実装の方向性

### 第三の方向性：AI活用による社会的価値の拡張

#### 9. 生成AI社会の目標を効率化ではなく人間の活動の高度化に置く

- 生成AIは業務効率化の手段として語られることが多いが、本調査では自己実現や成長といった幸福感の側面との関連も示唆された（第8章）。
- AIによって削減された時間や労力が、人間による創造的活動、対人活動、判断業務などに再配分されるのであれば、AIは社会全体の価値創造や幸福感を高める可能性を持つ。
- ⇒ したがって、生成AIの社会的活用を評価する際には、単なる効率化や経済効果だけでなく、人間の活動の質をどのように高めているかという観点も重視する必要がある。

## 謝辞

- 本報告書の作成にあたり、多くの方々のご協力を賜りました。まず、本研究の実施にあたり、グーグル合同会社のサポートを受けて進めている Innovation Nippon プロジェクトの一環として研究を進める機会をいただいたことに深く感謝申し上げます。
- また、本研究に関する貴重なご助言やご意見をくださった関係者の皆様、ならびに調査やデータ提供にご協力いただいた方々にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。最後に、本報告書のとりまとめに尽力いただいたすべての関係者に、心より感謝申し上げます。

## Innovation Nipponとは

- Innovation Nipponは、国際大学GLOCOMが、グーグル合同会社のサポートを受けて2013年に立ち上げた研究プロジェクトです。情報通信技術（IT）を通じて日本におけるイノベーションを促進することを目的とし、法制度や、産業振興・規制緩和等の政策のあり方、ビジネス慣行などに関する産学連携プロジェクトを行い、関係機関の政策企画・判断に役立ていただくための提言などを行っています。

書名	Innovation Nippon 生成AIと日本2026 概要版		
発行	国際大学グローバル・コミュニケーション・センター		
発行日	2026年4月		
執筆者	山口 真一	（国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 教授）	
	渡辺 智暁	（国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 教授）	
	逢坂 裕紀子	（国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 研究員）	
	大島 英隆	（国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 研究員）	

お問い合わせ 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター  
〒106-0032 東京都港区六本木6-15-21 ハークス六本木ビル2階  
電話：03-5411-6677  
FAX：03-5412-7111  
Webサイト：<https://www.glocom.ac.jp>



INNOVATION  
NIPPON

2026